

愛知教育大学 環境報告書

Aichi University of Education
Environment Report

2021



国立大学法人
愛知教育大学
Aichi University of Education

〒448-0001 愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢1
<https://www.aichi-edu.ac.jp>
総務課・施設課 Tel:0566-26-2152(施設課)
E-mail kankyo-h@m.auecc.aichi-edu.ac.jp

地方創生SDGs
官民連携
プラットフォーム



私たちは持続可能な開発目標(SDGs)を支援しています。

本学は2020年度に加盟しました。



Contents

学長メッセージ	3
環境方針・環境目標・計画	4
1.はじめに	5
報告対象範囲・対象期間・沿革の略図・キャンパス概要	
2.教育大学としての特色を活かした環境活動	9
持続可能な発展目標(SDGs)とその取組	
環境に関する教育・研究・地域貢献	
環境配慮の仕組みとその運用・法令遵守状況	
3.サステイナブルキャンパスを目指して	27
温室効果ガスCO ₂ 排出量の経年比較・省エネに向けた活動状況	
環境負荷状況とその低減対策・総エネルギー投入量及びその低減対策	
グリーン購入の推進状況・水資源投入量及びその低減対策	
廃棄物排出状況・ごみ排出量及びその低減対策	
水質汚濁防止・大気汚染防止・PCB廃棄物の処分状況・化学物質取扱状況と管理	
その他の活動状況	
4.さいごに	39
まとめ・外部評価	

参考としたガイドライン

環境省「環境報告ガイドライン(2018年版)」

環境省「環境報告書の記載事項等の手引き(第3版)平成26年5月」

環境省「環境報告書に係る信頼性向上の手引き(第2版)(平成26年5月)」



学長メッセージ

国立大学法人 愛知教育大学
学長 野田 敦敬

本学は、2021年3月に新たな中長期ビジョンとして、3つの目標と9つの戦略からなる「愛知教育大学未来共創プラン」を策定しました。その取組の中で、キャンパスの自然を「学び」と「遊び」のリソースとして活用し、さまざまな実践プログラムを計画しています。「未来共創プラン」の実現を通して、自然豊かなキャンパスの魅力を再認識し、今後も、新型コロナウイルス感染症の拡大防止に全学を挙げて取り組みながら、本学の自然資源をこれらの戦略にも生かしていきたいと考えています。

私自身も本学の卒業生であり、学部・大学院と学んだ自然科学棟前のヒマラヤスギの成長と卒業式のころ満開となるシダレザクラには特別な思いがあります。また、木陰でゼミができれば素敵だと思います。学生の自然体験不足も深刻です。木々に集まる動物の生態を知ることは重要です。

一方、スズメバチの被害や台風による倒木など自然の猛威から学生や職員を守ることも大事ですので、安全管理上の視点も十分に考慮しながら、以下の4か条をモットーに学内の緑化にも取り組み、SDGsの理念を浸透させていきたいと思っています。



「花プロジェクト」学生と花の植え替え

1. 快適な学習環境・職場としてのキャンパス
……人が集う場所と緑地を共存させ、キャンパスに親和性を持たせる
2. 自然の営みを学べるキャンパス
……キャンパスの樹木や緑地を、「観察」や「学び」など教育の場として生かす
3. また来たくなる歴史を感じる美しいキャンパス
……長い年月を経た樹木は、大学の歴史を刻み美しい環境を形成している
4. SDGsの理念にも合致したエコキャンパス
……樹木や緑地の保全是、環境問題の優先的課題であり世界的な潮流である

国立大学法人 愛知教育大学 環境方針

I 基本理念

国立大学法人 愛知教育大学は、日々の教育研究活動をはじめとする本学の諸活動を通して、地球環境への配慮や省エネルギーの努力を続け、環境保全や持続可能な社会の構築への貢献などの社会的役割を果たします。

また、教育の総合大学として、高い学識と教養を身に付け、環境問題に理解があり、環境の保全に貢献し未来を拓く主体性のある子どもたちの教育を支え、持続可能な社会の実現に貢献できる専門職の育成に努めます。

II 基本方針

本法人の基本理念に基づき、全ての構成員が協力し、以下の活動を積極的に推進します。

- 1 環境に対する豊かな感性や見識を持った専門職を育成し、持続可能な社会の実現につながる環境教育と研究の推進に取り組みます。
- 2 環境関連法令等を遵守し、環境への負荷を正確に把握するとともに、省エネルギー、省資源、廃棄物の削減、資源の再利用等に係る目標を設定し、その実現に努めます。
- 3 環境保全活動などの情報の公開を行い、地域社会と連携を図りながら、地域環境や地球環境の保全、改善に貢献します。

2017年3月13日制定

環境計画（環境配慮目標及び取組計画）

教育

環境教育やESDの実践的な指導方法を教授し、発達段階に応じた環境教育ができる人材を育成する。

また、県内のユネスコスクールのESD活動に関する支援を積極的に行う。

研究

環境教育やESDに資する研究を推進する。

地域貢献・社会貢献

地域社会における環境配慮活動に寄与する。

また、企業等と協力して実施する環境教育活動を継続して発展させ、連携を強化する。

環境活動

学生・教職員の環境活動を通して地域社会と連携した取組の拡充を図るとともに、大学環境にふさわしい魅力あるキャンパスづくりを目指す。

環境負荷の低減

エコキャンパスに配慮した整備を国の財政措置の状況を踏まえて取り組み、第3期の6年間（平成28年度～平成33年度）でCO₂削減目標を平成27年度比（単位面積当たり）6%とする。

ゴミの減量による経費節減や物品リユースの推進を継続し、さらに学内への周知を徹底する。

環境安全リスクの低減

化学物質管理規程に沿った化学物質の取り扱いの周知徹底を図り、化学物質管理支援システム（TULIP）を利用した化学物質の購入から廃棄までの適正管理を徹底する。

情報開示

本学の環境計画に基づく諸活動の情報を積極的に開示する。

1

はじめに



正門からの風景

報告対象範囲・対象期間

報告対象期間

■2020年度
2020年4月1日～2021年3月31日

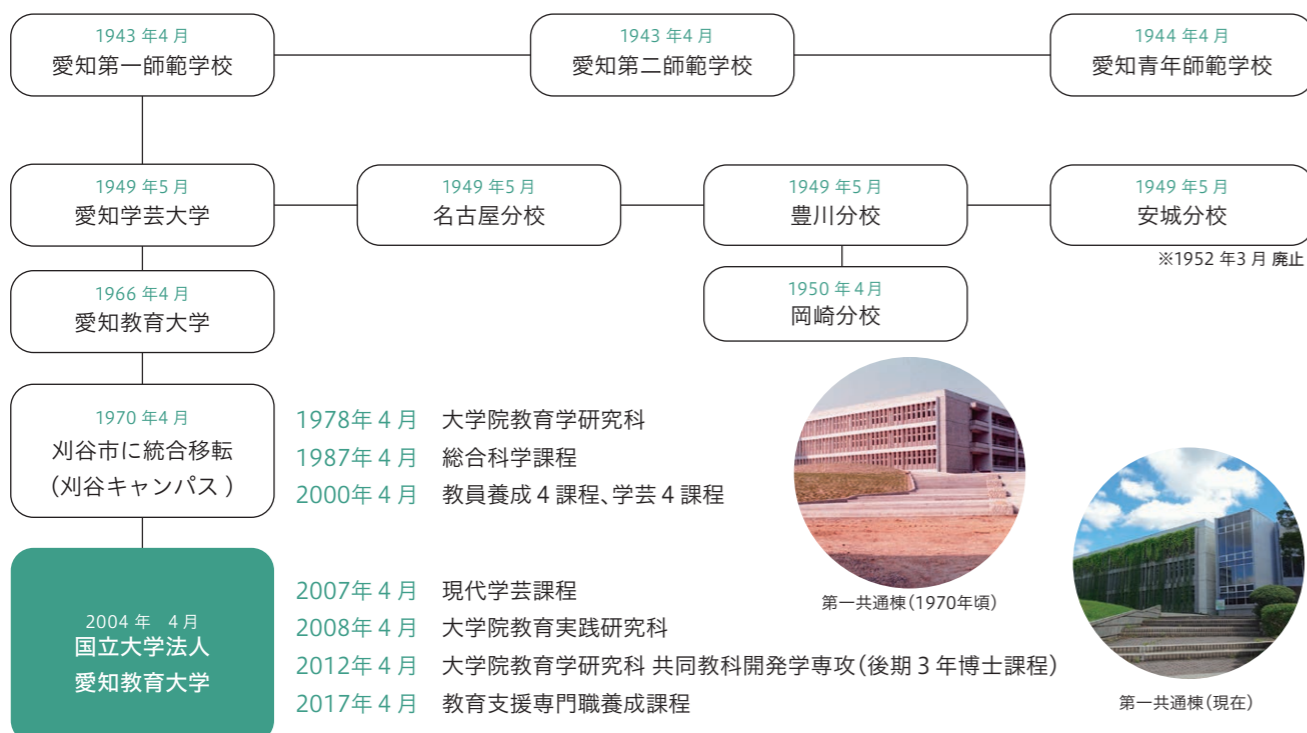
発行日

■2021年9月

報告対象範囲

- 刈谷キャンパス………大学・附属高等学校
- 名古屋キャンパス………附属幼稚園・附属名古屋小学校・附属名古屋中学校
- 岡崎(六供)キャンパス………附属岡崎小学校・附属特別支援学校
- 岡崎(明大寺)キャンパス…附属岡崎中学校

沿革の略図



①刈谷キャンパス

愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢1



土地	488,136㎡
建物	98,963㎡
構成員 教職員	383人
学部学生	3,743人
大学院学生	233人
専攻科学生	29人
附属学校生	589人
計	4,977人

②名古屋キャンパス

愛知県名古屋市長区大幸南1の126



土地	55,228㎡
建物	15,714㎡
構成員 教職員	75人
附属学校生	1,232人
計	1,307人

③岡崎(六供)キャンパス

愛知県岡崎市六供町八貫15



土地	64,348㎡
建物	11,034㎡
構成員 教職員	58人
附属学校生	646人
計	704人

④岡崎(明大寺)キャンパス

愛知県岡崎市明大寺町栗林1



土地	21,397㎡
建物	6,546㎡
構成員 教職員	27人
附属学校生	429人
計	456人

その他 研究施設等

生駒野外実習地	
土地	7,357㎡

全キャンパス

土地	637,968㎡
建物	132,257㎡
構成員 教職員	543人
学部学生	3,743人
大学院学生	233人
専攻科学生	29人
附属学校生	2,896人
計	7,444人

キャンパス概要

PICK UP
国際教育棟



2020年3月に職員用宿舎をコンバージョンした国際教育棟は多文化体験の場や留学生・外国人のための日本語教育の場として活用されています。



愛知教育大学附属学校園の紹介



- 1 附属幼稚園 〒461-0047 名古屋市長区大幸南1の126
- 2 附属名古屋小学校 〒461-0047 名古屋市長区大幸南1の126
- 3 附属岡崎小学校 〒444-0072 岡崎市六供町八貫15
- 4 附属名古屋中学校 〒461-0047 名古屋市長区大幸南1の126
- 5 附属岡崎中学校 〒444-0864 岡崎市明大寺町栗林1
- 6 附属高等学校 〒448-8545 刈谷市井ヶ谷町広沢1
- 7 附属特別支援学校 〒444-0072 岡崎市六供町八貫15



附属図書館



次世代教育イノベーション棟



教育未来館



教育・人文棟



- ・陸上競技場 ……1周400mトラック1面
- ・野球場 ……1面
- ・サッカー場 ……1面
- ・ラグビー場 ……1面
- ・ハンドボール場 ……2面
- ・プール ……50m 9コース
- ・洋弓場 ……1面(30・50・60・70・90m)
- ・弓道場 ……1棟
- ・テニスコート ……12面
- ・馬場 ……1面
- ・第一体育館 ……1棟
(バスケット、体操、バレーボール、バドミントン、ハンドボールなどに利用)
- ・第二体育館 ……1棟
(バスケット、バドミントンなどに利用)
- ・体育館附属棟 ……1棟
(卓球、舞踊などに利用)
- ・武道場 ……1棟
(各種武道に利用)
- ・トレーニングセンター棟 ……1棟



AUEセミナーハウス



教育交流館/AUEスクエア



2

教育大学としての特色を活かした環境活動

持続可能な発展目標 (SDGs) とその取組

愛知教育大学がすすめる ESD・SDGs

地域連携センター センター長/土屋 武志

新型コロナウイルスに端を発する生活様式、社会形態の変革が求められる今日、教育においても変革が求められています。昨年度より実施がはじまった教育課程においても、「持続可能な社会の担い手の育成」のための社会に開かれた教育課程の実現が求められています。

感染予防やワクチン接種などによる新型コロナウイルスへの対策だけでなく、気候変動に伴う異常気象や関連する気象災害、ジェンダーや人種などの人権など、さまざまな課題を解決し、持続可能な社会を構築していくため、それらを実現できる児童・生徒の育成が求められています。

このような課題を解決するものとして、ESD (Education for Sustainable Developmentの略で「持続可能な開発のための教育」) があります。ESDでは、地球に存在する人間を含めたすべての生物が、遠い将来まで営みを続けていくために、これらの課題を自らの問題として捉え、各自ができることを考え、実践していくことを身につけ、課題解決につながる価値観や行動を生み出し、持続可能な社会を創造していくことを目指す学習や活動です。すなわち、ESDは持続可能な社会づくりの担い手を育む教育を指します。

また、課題を解決する目標として、持続可能な開発目標 (Sustainable Developmental Goals; SDGs) があります。このSDGsは、2015年9月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」にて示された2030年までの国際目標です。持続可能な世界を実現するための17のゴール・169のターゲットから構成され、地球上の誰一人として取り残さない (leave no one behind) ことを誓っています。

このような社会状況の中、本学でもSDGs、ESDを基盤とした取組を積極的に進めています。2020年度、本学は内閣府が進める「地方創生SDGs官民連携プラットフォーム」



フォーム」に加盟しました。SDGsの取組はそれぞれの機能が単独で進めるのではなく、さまざまなステークホルダーと協働・連携することにより、促進されます。そのために、このプラットフォームへの参画をきっかけに、展開を図っていこうと考えています。

また、2021年度から文部科学省令和3年度ユネスコ活動補助事業「SDGs 達成の担い手育成 (ESD) 推進事業」に採択され、事業展開をはじめました。SDGsを達成するためには、ESDの手法が必要であるとする「ESDfor2030」が提唱され、本事業では、「ESDfor2030AICHIプロジェクト」を掲げ、本学を中心に愛知県内のSDGs未来都市の学校教員とESDを充実させるための研究会を発足し、愛知県内のSDGs達成に向けた学校教育の充実を図っていく予定です。

このような大学を中心とした取組に加え、教職員によるSDGs達成のための教育・研究活動、クラブ・サークルによる団体や学生個人によるSDGs達成のための教育・普及支援活動など、さまざまな取組が増えつつあります。今後、これらの活動を軸に、愛知県、東海地方におけるSDGs達成のための教育を展開できる人材を育成していくことが本学の使命と考えます。

環境に関する教育・研究・地域貢献

子どもや市民を対象とした生物多様性に気づかせる教材開発

理科教育講座/大鹿 聖公



令和2年度は、COP10 (生物多様性条約第10回締約国会議) からちょうど10年であり、愛知県では生物多様性に関する様々なイベントが開催されました。これらのイベントに本研究の学生とともに、さまざまな教材開発を行いました。

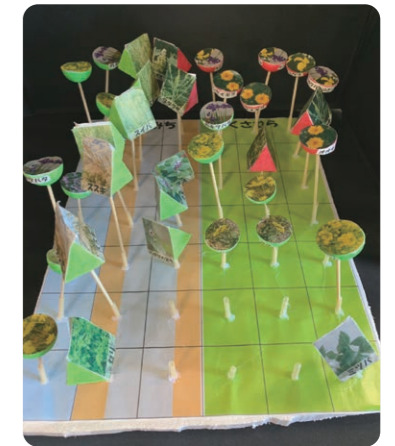
一つはクリアファイルで、表面には在来種のみを、裏面には外来種をそれぞれ印刷してあります。ファイルに紙を挿入すると、表面の在来種のみが見えますが、紙を取り外すと外来種が現れ、在来種に影響を与えていることが視覚的に理解できるようになっています。

また、別の教材では外来の植物がどのように現在の街中に繁茂してきたか、それらをどのように駆除することが可能かを理解するためのモデル教材の開発も行っています。外来種のイメージは、一般に人間に多大

な悪影響を及ぼすものとして定着していますが、外来植物ではそのようなイメージがないものも多くあります。そのような認識を変え、身近に存在する外来植物を理解してもらうため、これらの教材を活用し、理解普及に努めていきたいと考えています。



在来種・外来種クリアファイル



外来種の繁殖理解モデル教材

名古屋の施設での校外学習で活用できるワークシートの開発

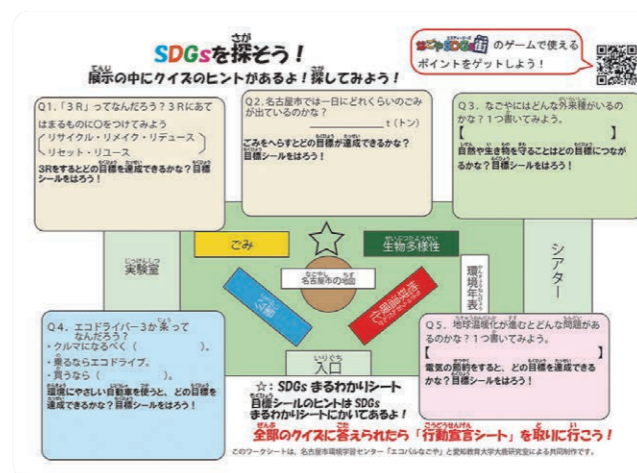
理科教育講座/大鹿 聖公



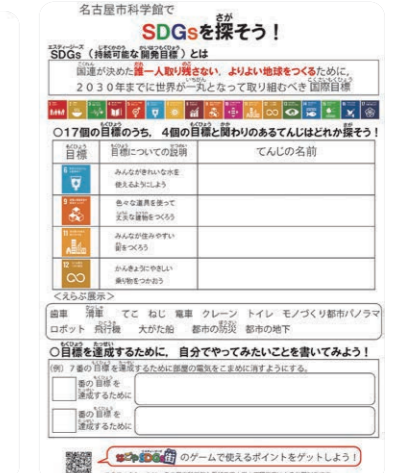
2019年名古屋市はSDGs未来都市に選定され、名古屋市におけるSDGsの普及啓発を行っています。市民協働によるなごや環境大学の中にSDGs未来創造クラブを発足し、そこで小学生を対象とした人づくりプロジェクトを進めています。小学生が名古屋市内でSDGsを学べる施設をSDGsフィールドとして設定し、また施設におけるSDGsの取組をSDGsチューブとして動画配信などを行っています。

SDGsフィールドにおいて、小学生が施設見学しながらSDGsが学習できるように、本学大鹿研究室が協力して、施設において活用できるSDGsのための学習ワークシートの開発を行いました。令和2年度は、ワークシートの第1弾として、「名古屋市科学館」と「名古屋市環境学習センターエコパルなごや」の2種類を作成しました。科学館のワークシートは展示物の技術がどのようなSDGsに関連しているかを結びつけ

るもの、エコパルなごやのワークシートは、展示解説に関するクイズとなっています。いずれのワークシートも裏面にSDGsの解説シートを添付し、ワークシートの活用後もSDGsを一人で学習できるようになっています。このほか東山動植物園、名古屋港水族館、でんきの科学館など小学生が校外学習にでかける施設を中心にワークシートを順次開発していきます。今後、これらの施設を訪れた際には、ワークシートを手にとって学習してみてください。



エコパルなごやのワークシート



名古屋市科学館のワークシート

子どもたちが木のおもちゃに触れて遊ぶ取り組み

幼児教育講座／樋口 一成



2015年度から長野県の根羽村森林組合と、2018年度から愛知県の豊田森林組合とそれぞれ連携・協力して、木のおもちゃの展示を各地で行っています。

毎年50か所以上の会場で活動していますが、コロナ禍の影響から、2020年度は子どもたちに木のおもちゃに触れて遊ぶ機会が激減しました。しかし、そのような状況下でも2つの森林組合の方が積極的に動いてくださり約20か所の会場で活動することができました。

その中の一つ、10月3・4日には、安城市の安城アンフォーレにて行われたイベント「ねばのもりとあんじょうあつまれねばの森 in アンフォーレ」では、大型の木のおもちゃ10点を展示し、地元の子どもたちに触れて遊ぶことができました。

そのほか、刈谷市立富士松北保育園からは、「コロナ禍の影響から、子どもたちのための行事が十分にすることができず、また子どもたちが身体全体を使って遊ぶ機会がとて減っていることから、子どもたちが大型の木のおもちゃで遊ぶ機会を作って頂けないでしょうか。」との依頼を11月中旬に頂き、12月15～18日の4日間、大型の木の



安城アンフォーレにて

おもちゃ10点を園舎内に設置させて頂きました。そして、保育園の子どもたちに、全身で木のおもちゃに触れて遊ぶことができました。

どの会場でも、展示中ずっと木のおもちゃから響く心地よい音と、会場全体に広がる檜の香りに包まれました。



刈谷市立富士松北保育園にて

身の周りの“音”を聴くことから始まる表現活動

幼児教育講座／麓 洋介



幼児教育選修2年次後期に開講される「保育内容指導法・表現」では、初回授業時に学内を散歩しながら様々な音を“聴く”活動を行います。

この活動は、カナダの作曲家・音楽教育者であるマリー＝シェーファーによる「サウンド・エデュケーション」を参考にしたものです。学生たちは誰とも話さず、



“音を聴く”散歩

30分間自由に学内を散歩し、聴こえた音をワークシートに書き込みます。聴覚に意識を集中することで、鳥の鳴き声や風の音、自分の足音、また普段は意識しないような小さな音など実に多くの“音”に気がきます。このような「音環境」(=soundscape, マリー＝シェーファーによる造語)への気付きは聴覚を鋭敏にするとともに、聴覚を通して自身が暮らす世界を知ることにつながります。

その後、教室に戻るとグループごとにサウンド・マップを作成します。各自が持ち寄った音について、模造紙にオノマトペで書き表します。サウンド・マップの作成を通して、学生たちは人によって音の聴こえ方や感じ方が違うことなどに気がきます。そして、出来上がったサ

ウンド・マップを図形楽譜として用いて声で表現し、ボイス・アンサンブルによる音楽表現の発表を行いました。サウンド・マップ上を仮想的に歩き、その周りで聴こえる“音”を声で表現します。歩みに合わせて変化する“音”から情景を想像するとともに、オノマトペによる音の響きやリズムの重なりによる即興の「音楽」として発表を楽しみます。

幼児教育では、子ども自身の体験から様々な表現遊びが展開されます。日常生活における様々な「感じる」「見る」「聴く」「楽しむ」体験は子どもの感性を豊かにし、表現する意欲を育てます。また、実体験を伴うことで表現にリアリティが生まれ、想像力を豊かに育みます。そのような保育を実践できる保育者に求められる資質として、五感を意識した環境への気付きの体験は重要な意味を持っていると言えます。



サウンド・マップの作成



音楽表現の発表

「多文化体験活動」を通して学生たちは何を学んだのか ～支援のバトンをつなぐことで「環境」について考える～

特別支援教育講座／小倉 靖範



「多文化体験活動」(フィリピンコース)の第1期メンバーは、新型コロナウイルス感染症が拡大する前年(2019年3月)にフィリピンのセブ島を訪れ、墓地やゴミ山、貧困地域で暮らす子どもたちの生活など、現地の生の姿に触れることを通して、貧困や環境などの社会問題について知ることができました。帰国後、有志が集まり、「AUE学生チャレンジ・プログラム」への応募を通じて、フィリピン支援が始まりました。その取組の一環として、学内において古着や文房具などの支援物資を集め、フィリピンの子どもたちへ送ることを予定していましたが、支援物資を集め終わった段階で、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、物資を送ることすらままならない状況となってしまいました。

そして、支援のバトンは、第2期メンバーに引き継がれることとなりました。フィリピンに行くことはできないため、①愛知県内に在住しているフィリピンの方々との文化交流、②フィリピンJICA青年海外協力隊を経て、現在もフィリピン支援を行っている上田敏博氏をゲストティーチャーに迎え、フィリピンの貧困問題や環境問題について考えるワークショップ型授業、③現地の貧困地域とのオンラインによるビデオ通話を通しての交流など、できる限りフィリピンの今が感じられる工夫を試みました。しかし、学生らが実感としてどこまでフィリピンを感じられているのか、現地への引率経験がある私にとっては、もどかしい思いが残りました。

た。ようやく最後に、前年度、送ることができなかった支援物資をみんなで段ボールに詰め、マニラとセブに送り、フィリピンへの支援活動の第1弾が区切りを迎えました。

これらの体験活動を通して、学生らは、貧困や環境等の社会問題と教育が密接に関わっていることを学ぶことができました。しかし、それ以上に意味があったことは、支援のバトンが繋がったことで、自分たちが起こした行動が、社会の様々な問題の解決に近づく可能性があるということを実感できたことだと思います。第1期メンバーの「我々が考える『環境問題』への取組とは、教育を受けたくても、受けることができない子どもたちの環境を少しでも変えていくことです」(愛知教育大学環境報告書2020)という想いを、今後も支援のバトンとしてつなげることが、SDG 5が描く持続可能な未来につながると考えています。



愛知県内に在住のフィリピンの方々から現地の話を聞いた後の文化交流



貧困地域で暮らす大学生とのオンラインによる交流(右上:愛知教育大学)

絵画材料・用具の処分に関する演習(「絵画研究:4年後期」)

美術教育講座／松本 昭彦



美技家棟改修工事と、それに伴って、美術実習棟内の教室もいくつか使用目的が変更になったため、令和2年度末までに《絵画実習室》《版画実習室》などを空き室にする必要にせまられました。これらの部屋の什器類や図書などの移動は引越し業者に任せるとして、不要になった絵画材料と用具については自ら片付けなくてはならず、卒業論文と卒業制作が終わったばかりの研究室の4年生とともに、ゼミ科目である「絵画研究」の一環として、絵画に関わるゴミの出し方について学習活動を展開しました。

《版画実習室》には、使いかけの版画インクや石油系溶剤、ゴムのりなどの材料や、ヘラやローラー等の用具がたくさん残っていました。インクは鉄の缶やアルミニウムのチューブに入っていたのですが、練り油である亜麻仁油の酸化重合がかなり進んでおり、固化しかけのインクを取り出す方法についてみんなで話し合い、床に新聞紙をひろげ、小型のボールなどを使ってかき出すことにしました。マスクと手袋を着用し、換気しつつ、容器の内側に付着したインクも溶剤をしみ込ませたぼろ布で拭き取りました。新聞紙に出したインクや使用後のぼろ布などは可燃ゴミとして処分し、

容器は乾燥させたのち、使わない道具類とあわせて透明ビニール袋に入れ、不燃ゴミとして事務職員の検査を受けてから回収コンテナへ運びました。

《絵画実習室》には、不要な油絵具、顔料、樹脂溶液、乾性油などの材料がありました。コバルトやカドミウムを含む顔料は環境保全に配慮して業者による回収に任せました。絵具や油脂類は版画インクのときと同様に新聞紙やぼろ布の上へ出したのちに可燃ゴミとして、チューブや容器類は不燃ゴミとして処分しました。

美術を専攻する学生たちには日頃の授業の中で、パレットに出した絵具の処理方法や、筆の洗い方を指導しています。今後は容器ゴミの出し方も教えていこうと思います。



イラスト:インクをかき出す学生



イラスト:チューブを絞り出す学生たち

保健科における「健康と環境」の模擬授業

養護教育講座 / 山田 浩平



小・中・高等学校の保健体育科の保健分野（領域）では、「健康と環境」の単元が設けられています。保健科を担当する学生は教育実習でその単元の授業をすることもあります。写真は、本学養護教諭養成課程の学生が、小学校の「気持ちのよい生活環境（身の回りの環境）」の単元の模擬授業をしているところです。授業の目標は、健康の保持増進には生活環境が関わっており、部屋の明るさの調節や換気などの生活環境を整えることが必要であることを理解できるようにすることです。

養護教諭は学校環境衛生基準に基づき、学校薬剤師のもと年に1回、教室内の明るさについて照度計を使用して計測したり、教室内の二酸化炭素濃度について検知管

を使用して計測したり、水質検査などをしたりしています。これらの保健活動を児童や生徒たちに知ってもらうとともに、保健の授業では学習者に気持ちのよい生活環境について興味を持って取り組めるような教材開発をおこなっています。この授業では、換気に視点をあて、部屋の窓を1箇所開けた場合と2箇所開けた場合の煙の動きを比較できるような教材を作成して実験授業をしています。

このような模擬授業をととして、健康と環境に対する授業者の資質を高めるとともに、参観している学生も教材について考えることで相互に学びあっています。



インドネシアの小・中学校への環境教育の導入

学校教育講座 / 野平 慎二



私が関わっているNGO「インドネシア教育振興会」は、JICAやインドネシアの3都市（南タンゲラン市、ポゴール市、バリクパパン市）の教育局などと連携して、7年前からインドネシアの小・中学校に「環境」という教科を導入するプロジェクトを実施しています。主な活動内容は、小学校高学年と中学校用の教科書、ならびに教師用指導書の作成、教員向けの研修会の実施、そして週1時間の教科「環境」の授業の実施と検証です。

教科「環境」の特徴として、教科横断的、総合的な学習形態を取り入れていることや、知識の習得のみならず環境保護に向けた態度の育成を目標としていることなどが挙げられます。インドネシアでは知識を一方的に伝達するスタイルの授業がなお主流で、教科横断的な学習形態や生活経験を出発点に置いた単元構成、意欲や態度といった非認知的能力の育成を目指す授業は緒に就いたばかりですが、どの都市でも若い先生を中心に新しい授業スタイルに意欲的に挑戦しようとする姿が見られます。

教科書の作成を終え、教員研修も終えて、いよいよ教科「環境」が本格実施されるはずだった2020年、あいにくインドネシアもコロナ禍に見舞われ、オンライン授業を余儀なくされました。先生も生徒も、リアルな自然体験、生活体験をもとにした環境の学習ができないことを

とても残念がっていました。反面、3都市の学校をオンラインでつないだ予定外の授業が自発的に行われるなど、新しい展開もありました。とりわけ中学校では、コロナ禍を契機として、自然（ウイルス）と人間との共生のあり方や、各家庭の学習環境（オンライン環境）の格差の問題が取り上げられました。これはこれでリアルな環境教育となりました。

まだまだ試行錯誤の段階ですが、1日も早くコロナ禍が収束し、教科「環境」が根付いていくことを願っています。



オンラインを用いた環境の授業（小学校）



オンラインを用いた教員研修会の様子

マスクの選び方、つけ方、外し方を学びながら考える高校保健授業の実践

保健体育講座 / 榎原 洋子



2020年は世界中で新型コロナウイルス感染症が広がり、マスク購入が急増・品切れや、スーパーコンピューター『富岳』を使った飛沫拡散シミュレーターが話題となりました。

2014年より、学部共通科目「環境安全全リスクと私たちの健康」、保健体育大学院授業「環境保健学特論」等で、サージカルマスクと防じんマスクの現物を取扱ながらアスベストなどの微細粉じんによる空気環境リスクと呼吸器保護について取り上げてきました。2000年は、2つの高等学校（岡崎工業高校、愛教大附属高校）で非常勤講師を務めていた保健体育専攻科の修士2年生木村颯さんが、保健領域の「働くことと健康」という単元の教科書コラムのアスベストをきっかけに、職業性疾患の問題から一般環境問題としても展開できること、アスベストリスクを災害時の環境リスクとして考えること等への展開を考え、自分でできるリスクコントロール手法として「マスクの種類と選び方」、「正しいつけ方」「外し方」などを高校の授業で実践しました。感染症対策にも使わ

れる使い捨て防じんマスクを装着した生徒からは、「マスク慣れしてきたのに結構苦しい」、「ウイルスやアスベストを吸わないようにするためにはこんなにしっかりしたマスク（防じんマスク）をつけないといけないことに驚いた」、「普通の衛生マスク（サージカルマスク）でもすき間ができないようにつけられるようにしたい」という声が多数挙がりました。



大学授業では、現物を見せたり、装着したり、フィッティングテストを試みてきました。

自然科学棟等大型改修工事に伴い発生した多様な廃棄物と適正処分についての参与観察

保健体育講座（危機管理室） / 榎原 洋子



2020年度は老朽化した自然科学棟と演習棟の大型改修工事が行われました。その準備のために前年度から実験室や研究室の仮移転と不用試薬等の廃棄作業が始まっていましたが、当初予測以上の多様な廃棄物が排出され、教育研究活動に加わった工事スケジュール期限、さらに新型コロナ感染症の影響もあり、従来の処分手続きでは対応できないほどの厳しい状況になりました。多様な廃棄物とは、理系研究棟らしく大量の不用試薬や実験廃液、PCB・水銀・アスベスト含有物、ガス状物質、素材分別の難しい工作物、実験機器、自作生物標本、実

験サンプルなどがありましたが、学術研究支援課自然系チームを中心にした柔軟な対応と教職員の協力によって多くの困難を乗り越えることができました。今回の改修工事に伴い発生する廃棄物処分への参与観察からは、マニュアル資料等の技術的解決の重要性だけでなく、関係者間のチームワーク力の維持・向上に資するチームリーダーの情報共有のための工夫や行動が関係者とのコミュニケーションコストを低下させ、周囲に協力を促す効果があったことなどが、メール・作業手順書等のドキュメント時系列分析で明らかになりました。ただし、粉末・液状・ゲル状の中身の入った生活用品やライターなどの発火危険物、充電式小型家電や蓄電池等については、適正処分のための学内ルール・手順や広報等が今後の検討課題として残りました。



移転日までに処分手続きが完了できなかった廃棄物



15個中8個がアスベスト含有製品だったマントルヒーター



SDGs 総選挙

附属高等学校 / 小田原 健一



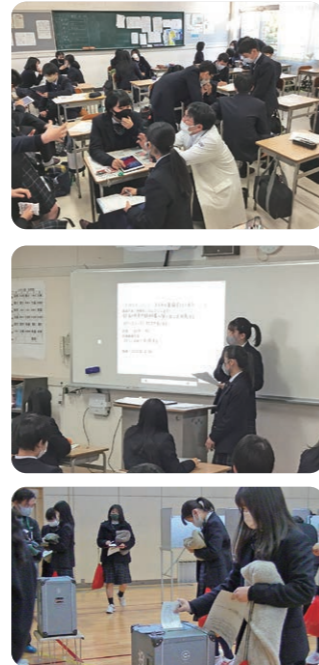
第2学年の総合的な探究の時間では「SDGs 総選挙」と題して、SDGsを主要な争点とした主権者教育を実践しました。実践の目的はSDGs (Sustainable Development Goals = 持続可能な開発目標) に関する探究活動と主権者教育を融合させることで、両者の魅力を高め、より効果的な授業を実現することでした。

生徒達はSDGsの17分野の目標の中から興味を持ったものを3つ選び、目標が似通った者同士で4人以下の政党を結成しました。政党ごとに、SDGsの目標を通して学校を魅力的に変革していくためのマニフェストの作成に取り組みました。生徒達の中から出てきた政策は以下のようなものです。

- 目標5「ジェンダー平等を実現しよう」にむけて、男女間の制服を自由にする
 - 目標11「住み続けられるまちづくりを」にむけて、学校で地域の方々に向けたフリーマーケットを開催する
 - 目標12「陸の豊かさを守ろう」にむけて、校内に鳥の巣箱を設置する
- これらの政策をまとめたマニフェストを基に、まずはクラス内の代表政党を決める予備投票を行いました。5クラスから選出された代表政党のメンバーは体育館で全

学年の生徒と、この授業の企画に関わってくださった愛知教育大学社会科教育講座の真島聖子先生とそのゼミ生の前で、演説と質疑応答に臨みました。最後の投票は、刈谷市役所から実際の選挙機材をお借りして行い、学校のペーパーレス化を強く訴えた「結果にコミット党」が最多得票を獲得しました。

この活動で、生徒達のSDGsや選挙に関する関心が高まったことが事前・事後アンケートからわかりました。また、学校も今まで紙で配付していた種々の通信を配信形式に変えるなど紙の使用量削減に取り組んでいます。



環境と教科「生物」

附属高等学校 / 船井 裕由



高校の生物は環境教育や環境問題と密接に関わっています。生物基礎では「生物の多様性と生態系」、生物では「生態と環境」という編があり、バイオームとその分布、物質循環、生態系のバランス、生物多様性の保全といった内容を学びます。この分野では、生徒達が環境問題を身近に感じることができるよう配慮して授業を行っています。

例えば生態系のバランスという項目では、ウニとジャイアントケルプとラッコの関係を例にあげ、ラッコの数が減少した場合に3者の関係にどのような変化が考えられるかを考えさせた上で、ラッコがその環境のバランスを保つ上で重要な役割を果たすキーストーン種である、ということ学びます。

同様に、生物多様性の保全という項目では、酸性雨や地球温暖化、里山や干潟の生態系、湖沼の富栄養化、生物種の絶滅、外来生物の移入、遺伝的攪乱といった観点から人間の活動がどのように

環境へ影響を及ぼしているのかについて学びます。とりわけ酸性雨や地球温暖化、生物種の絶滅、外来生物の移入といった内容は生徒にとっても身近な話題であることが多いので、調べ学習や発表活動を交えながら授業を行うことで生徒の環境問題への興味関心を引き出そうとしています。

この分野を通じて、人間と人間を取り巻く環境の過去から現在を学ぶことで、人間と生物や環境との未来志向を身につける、つまり自然や人間を取り巻く環境との共存の可能性や環境保全の視点や考え方を身につけた生徒を育みたいと考えています。



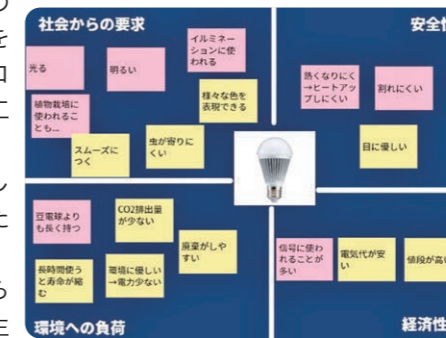
技術科・オリエンテーションの授業を通して

附属名古屋中学校 / 戸苅 祥崇



現代の社会は、多くの製品やサービスが満ちあふれており豊かな生活を送ることができています。そのような社会の中で生活をしている生徒は、自分にとっての利便性や価格を重視して製品やサービスを選択しているように感じます。しかし、未来を担う生徒には、地球環境や自然環境が適切に保全され、将来の世代が必要とするものを損なうことなく、現在の世代の要求を満たす持続可能な開発を実現することが求められています。

そこで、技術科のオリエンテーションの授業の中で、身の回りの技術の代表的なLEDを、「社会からの要求」「安全性」「環境負荷」「経済性」の4側面から捉えさせる学習活動を行いました。まず初めに、ロイロノートを活用してLEDの特徴や工夫について記述しました。次に、ロイロノートの共有機能を使用しながら発表を行い、カードに新たな考えを記述しました。そして、生徒の発表を教師が整理しながら4つの側面に分類することで、生



徒は技術を4つの側面から捉えることができ、4つの側面から捉えることの必要性に気付くことができました。また、生徒は「生活を便利に豊かにしていながらもその周りの環境のことも考え、上手に共存することが必要である」「消費者が環境への意識を高くもつことが環境負荷のことを考慮した開発につながる」といった感想を述べており、よりよい技術開発に向けて環境に与える負荷について考えることの大切さについて学ぶことができました。



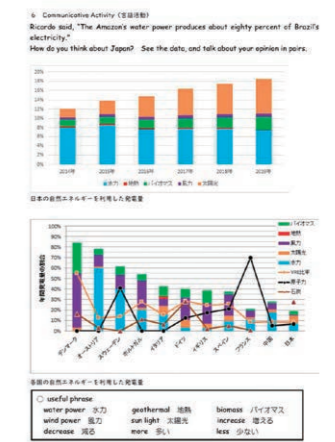
英語科・Unit 2 From the Other Side of the Earthの学習を環境問題への取組にいかす

附属名古屋中学校 / 柳田 真弥



単元”Unit 2 From the Other Side of the Earth (中3、東京書籍)は、アマゾンの熱帯雨林が人間の手によって破壊され続けている現状を伝えることが題材とされています。この題材から、様々な環境問題について考え、環境や動物を守るために自分たちのできることや課題についてスピーチをしました。授業が進んでいく中で、環境問題に関して調べたことや、それぞれの問題に対する自分の考えを交流し、地球規模の大きな問題だけでなく、自分の身の周りに起きている小さなことも環境問題の1つとして捉えることができました。スピーチでは、「水の無駄遣いをなくすために、日々のお風呂のお湯の使い方を考えることで、環境問題に対して取り組んでいきたい。海外では、シャワーの時間を短くしているの

えてしまっているの、ゴミ拾いに取り組みたい。」といった内容が話されていました。他にも、「この夏に始まるレジ袋有料化を受けて、レジ袋などから起こるプラスチックゴミの問題」や「実際に近所のゴミ拾いをして、たくさんのタバコのポイ捨てのゴミがあった経験」をもとにスピーチをするなど、身の周りの問題に対して、主体的に考える姿も見られました。単元を通して、教科書の内容だけでなく、自分の身の周りのことや興味のある環境問題とその影響について調べたり、話し合ったりすることで、環境への意識の高まりが、スピーチの内容からも感じられました。



私たちのアクションが未来を創る ～SDGsスタートブックを使ったモデル授業～

附属岡崎中学校／今泉 匡博



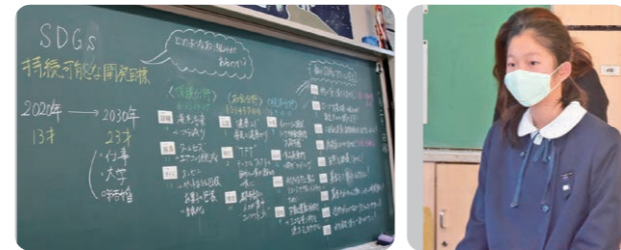
愛知県は、「SDGs未来都市」に指定されています。本校では、『中学生のためのSDGsスタートブック』（愛知教育大学理科教育講座／大鹿聖公教授監修）を活用したモデル授業の実践を行いました。

授業では、誰一人取り残さないようにするために、世界で取り組む「17の共通目標」を三つの分野（経済・社会・環境）に分け考え、自分にできる「SDGsアクション宣言」を考えました。

子どもは、17の共通目標について、それぞれ関心が高いものを選択し、タブレットを活用して調べ学習を行いました。その中で、今世界が抱えている諸問題について、初めて知ることが多く、自分事としてとらえる第一歩を踏み出しました。そして、世界と自分をつなげて考えることができました。授業後半では、それぞれの「アクション宣言」について、意見交流を行いました。私たちにできる一つ一つのことは小さな取り組みかもしれませんが、一人一人がSDGsを意識し、行動することで大きな力になることを実感しました。

授業の振り返りを紹介します。

- 世界は様々なことが組み合わさってできていて、一人一人が行動すれば大きな力になると思いました。
- 今日の授業をとおして、この大変な時代において、たくさんのよい取り組みをしていることが学べました。そして、愛知県がこのように努力していることを知って、とてもうれしくなりました。
- 私は、14の「海の豊かさを守ろう」について追究しました。その中で、海洋プラスチックごみが生き物に悪影響を与えていることを知り、心が痛くなりました。だから、ごみをポイ捨てしない、プラごみを増やさないといった私たちでもできることを徹底していきたいと思いました。そして、今を生きる私たちの世代が、SDGsを意識した行動を心がけようと呼びかけていく必要性を感じました。



英語科・日本人のボランティア意識について考える

～The Gift of Giving (Different Countries) の実践より～ 附属岡崎中学校／井戸田 真征



本単元では、ボランティア活動のあり方について考えることで、社会参画意識について見つけました。日本人のボランティア活動への意識を高める方法を議論することで、「ボランティア活動を奉仕や善意をもった活動」と考える日本人と、「主体的に他者や社会と関わる活動」と考える外国人との考え方の違いに気づくことをねらって実践をしました。

実践では、子どもは「胸キュン！GOMI拾い」というボランティア活動に取り組みました。「胸キュン！GOMI拾い」とは、参加者同士が手をつなぎ、英語でコミュニケーションをとりながら、審判から胸キュンポイントを獲得するという遊びの要素を取り入れたごみ拾い活動です。子どもは、活動の感想を交流した後、東京オリンピック・パラリンピックのボランティア記事を読んで、ボランティア応募者数の約半数が外国人の人であることを知りました。そして、日本人のボランティア活動への参加率

や意識について調べ始めました。その中で、The World Giving Indexのデータ（ボランティア参加率）から、日本人には日常的なボランティア活動自体が根付いていないことを知りました。そして、「日本も外国のようにボランティア活動へ積極的になるにはどうすべきか」という問題を見だし、追究をしていきました。外国人への取材や意見交流をとおして、日常的な人とのつながりをもつ行動や、他者に対してオープンな接し方をすることがボランティア活動を活発にするためには大切だと考えました。



社会科・共創社会の一員として、持続可能な生産と消費に挑む ～小4「ごみ、どうしよう」の学習を例に～

附属名古屋小学校／笠巻 一倫



4年生「ごみ、どうしよう」の学習では、毎日出るごみの処理は、事業者の工夫（公助）、地域での取り組み（共助）、私たちの努力（自助）で成り立っているということ学びます。

さらに、視野を広げ、共に社会を創るという視点から、今回は名古屋発祥の喫茶文化をけん引するコマダ珈琲店を教材として取り上げました。コマダ珈琲店が現在課題として挙げている「コーヒーかすの処理方法」について真剣に考えることで、より持続可能性をもった共創社会の一員としての自覚をもたせることができると考えました。

児童は、普段は見えないごみ問題に触れて、さらに危機感をもったようです。一日45tも出るコーヒーかすは、ただ捨てられていくだけであり、少しでも役立つことはできないかと、コマダ珈琲店から課題提示を受けました。「樹脂と混ぜて、プラ



スティックになるらしい！」「テイクアウト用の容器をコーヒーかすで作れば…」「消臭効果があるから、商品化すれば…？」など、子どもらしいアイデアがたくさん出ました。実際オンライン会議をしても、コスト面や技術面での課題が浮き彫りになり、解決の道りは簡単ではないことが分かりました。

「とても難しい課題だけど、小さな一歩から」「まずは、自分の周りから取り組みたい」大人へのチャレンジは、確実に共に社会を創る一員への第一歩となりました。

4年 算数科「数値の意味を考えて伝えるよ 気づいてほしいな 節水の心 -がい数-

附属岡崎小学校／木村 英勝



社会の学習の振り返りをするなかで、子どもたちのなかから「ゴミを減らす意識は今でもあるけど、水は大切に使っていないかも」「水が出っぱなしなときがある」という声があがりました。水を大切にしていないのではないかと意識をほりおこしたうえで、学校の水が出っぱなしにしている映像と出会ったところ、子どもたちは、全校に水の大切さを伝えたいという思いをもちました。まずは、1か月の水の使用量や一人あたりの1日の水の使用量、30秒で流れる水の量など、様々な水の量を子どもたちは調べ始めました。調べた水の使用量の伝え方を模索していくなかで、低学年にも学校の水の使用量の多さが伝わるようにしなければならぬことに気づきました。そこから、1か月の水の使用量をプール何杯分やお風呂何杯分、ペットボトル何本分などで表そうと考えるようになり、生活のなかで四捨五入を用いる有用性に気づいていきました。さらに、水の量の多さが伝

わる表し方を追究していくなかで、「水の多さを伝えるためには、切り上げをして概数で表したほうがよい」や「プール0.1杯分は、約3000Lだからどのくらいの量が考えてから四捨五入したほうがよい」、「四捨五入するときには本当の数から離れすぎたはいけない」など、目的や数値の意味を考えたいうえで、概数の処理をしていくことが大切であると気づきました。低学年にもわかるように、1か月の水の使用量を大プール約13杯分と表した子どもたちは、各教室へ行き、大プールの写真を13枚並べながら、使っている水の多さと節水の大切さを呼びかけました。その結果、呼びかける前の週と比べて6300Lも水の使用量を減らすことができました。この単元を通して、子どもたちは、算数科における学びとともに、水の使用量をはじめとする環境に対する意識を高めることができました。



令和2年度第6回かがやけ☆あいちサスティナ研究所に参加して

中等教員養成課程理科専攻 / 牧本 未来



令和2年度第6回かがやけ☆あいちサスティナ研究所に参加しました。今回は、本学から4名の学生が、株式会社ソーラコーポレーション、吉本興業株式会社、日本ガイシ株式会社、中部テレコミュニケーション株式会社の研究員としてそれぞれの企業が提案する環境問題の解決に向けて活動しました。

私は、コミュファ光の研究員として同じチームの学生やファシリテーター、企業の方たちと共に「持続可能な社会に貢献する新たな通信コンテンツを検討せよ」という課題に取り組みました。実際に本社を訪問し、通信コンテンツを体験したり、通信事業に携わる社員の方話を聞いたりして課題解決のヒントを得ることができました。研究員のそれぞれが考える「持続可能な社会」や、「通信コンテンツのよさ」を踏まえて、社会における様々な問題を「自分事化」できるコンテンツを提案することにしました。

今回の活動を通して持続可能な社会に向けて大切なことは何か、これから担う私たちにできることは何か、など、社会における問題を自分事として捉えることができました。また、普段関わるのが少ない他学部の学生との交流を通して、学びの視野を広げると共に、チームで活動することの難しさ、楽しさ、達成感を味わうことができました。今年は新型コロナウイルスの影響で例年のように活動することが難しかったですが、たくさんの方々の協力によって無事に活動を終えることができました。この活動を通して学んだことを活かして、今後の学生生活を充実したものにしていきます。



愛知教育大学からSDGsを広めたい

学生団体SAGA / 宮川 晃大



令和2年度から、愛知教育大学 学生団体 SAGA (サーガ)として活動しました。私たち自身が持続可能な開発目標であるSDGsについて理解するとともに、愛知県の子どもたちにSDGsを普及、啓発するために、教材の開発や出前授業、環境イベント等への参加など精力的に活動してきました。2021年に行われた、愛知学長懇話会 SDGsシンポジウムでは、これまでの活動の報告を行い、最優秀賞を頂きました。

私たちは、子どもたちがSDGsや環境問題、生物多様性等について楽しみながら学ぶことができる教材を作りました。具体的には、すごろくをしながらSDGsを学ぶことができる教材や、神経衰弱を行いながら、生物模倣を学ぶことができる教材を開発しました。これらの教材を用いて、イベントや出前授業等に参加し、実際に子どもたちに体験してもらいました。イベントでは、子どもたちが友達や保護者と交流しながら、教材を楽しんで取り組む姿が



見られました。これらの活動を通して、教材で遊びながら学ぶことによって、SDGsや生物多様性などに興味をもってもらうことができました。子どもたちが楽しみながら学ぶことができる教材がとても効果的であったため、これから愛知県の教育を担う私たちにとってこのような視点を大切にしていきたいと思いました。

今後は、新たな教材の開発、イベントへの参加、愛知県内の小中学校への出前授業の実施を精力的に行うと共に、学内でのSDGs認知度向上のための活動なども新たに行ってまいります。

「多文化体験活動」(フィリピンコース)を通して感じたこと ～フィリピンを通して自分たちに何ができるのかを考える～

教育支援専門職養成課程 教育ガバナンスコース / 4年 高津 朱里



私が多文化体験活動を通して感じた一番大きなことは、フィリピンは思っていた以上に身近だということでした。現地とオンラインでビデオ通話をつないでリアルタイムでつながることもできるし、英語を使えば会話をすることもできる。何より貧困地域で暮らしながらも、友達と笑い合う同年代の彼女たちの姿は日本の私たちと何の違和感も感じませんでした。

しかし、違った側面があることも改めて感じる機会となりました。フィリピン JICA 青年海外協力隊 OB の上田さんの「貧困の子どもたちは、基本的な生活習慣を身に着けたり、目一杯遊んだりといった当たり前の機会を得られない環境にある」という話や、ビデオ通話の映像で見た墓地やスモーカーマウンテン(ゴミ山から煙が立ち上る風景)での暮らしは、私たちの生活や当たり前とはかけ離れたものでした。今までもドキュメンタリー番組などでフィリピンの貧困の様子は見たことがあり



ましたが、遠い国の出来事であってどこか信じられない気持ちもありました。しかし、今回、実際に目の前にいる上田さんが写っている映像

を見たり、現地に住む人の口から直接、様子を聞いたりしたことによって、この環境が「本当に現実なんだ」とようやく受け入れられたような気がしました。

上田さんの「どんな困難を抱えた子どもにも必ず可能性は備わっている」というお話が印象深く、彼らの可能性を潰さないようにすること、無関心でないことが私達にできる一番の支援なのではないかと思うようになりました。今は、フィリピンのために自分に何ができるのかを考えられる人でありたいとも思っています。SDGsを意識して過ごすなどは、直接的な支援にはならなくても、フィリピンのためにできることの一つだと考えます。「常に、自分たちに何ができるのかを考えて生活すること」の大切さについて多文化体験活動を通して学ぶことができました。いつか実際に現地へ出向きたいという気持ちは一層、強固なものになったので、この気持ちを忘れず過ごしていきたいと思えます。



ペットボトルキャップの回収 (国際ボランティアサークルHearts)

初等教育教員養成課程社会選修 / 2年 肥田 勇祐



私たち国際ボランティアサークルHeartsは学内でペットボトルキャップの回収を行っています。

現在、ペットボトルは、年間約250億本が生産され回収率は62%、再資源化率は37%で完全再資源化には、ほど遠い状況となっています。再資源化を促進するには、ペットボトルからキャップを外し、ラベルをはがすことが重要です。日常生活のなかで頻りに利用されているペットボトルのキャップを、一般のゴミに混ぜてしまうと、焼却処分されCO₂の発生源になり、また埋め立て処分されると土壌を汚染し地球環境を破壊する事になります。地球温暖化の進行が心配されているなかで、ボトルキャップを分別回収することにより再資源化を促進し、CO₂の発生を抑制でき、そしてキャップの売却益で世界の子供たちにワクチンを届けることが出来ることにもつながります。

さらに今、世界中でプラスチック類の廃棄量削減がう

たわれています。それに伴い、国や企業がそれぞれその目標に向かって様々な取り組みをしています。SDGsにある「作る責任 使う責任」より、これからの人類のための資源保全と持続可能な社会づくりのために私たちはモノに囲まれた暮らしの改善を意識すべきです。先述した「ワクチンを届けるということ」と「環境保全と持続可能な社会づくり」のために私たちは小さなことでもいい、できることをすることが大切なのです。

最後に、これからもエコキャップ活動によって環境の保護と世界の子供たちにワクチンを届けていくとともに、自分たちが環境保護に意識を高めながら周りの人にも環境や資源の大切さを伝えていきたいです。



ラグビー部の清掃活動

中等教育教員養成課程社会専攻 / 4年 中村 航



私たちラグビー部は、毎週金曜日の朝の時間に大学内の清掃活動を行っています。日々私たちが思う存分活動できているこの状況に感謝し、大学内の清掃をすることで少しでも恩返しができればと思っています。また、大学内のゴミを少しでも多く減らし、多くの学生が気持ちよく大学生活を送れるように清掃活動を行っています。

清掃活動には校舎内と校舎外の2種類があり、隔週で行っています。校舎内の清掃活動では、教室内の机を並べること、机の中と床に落ちているゴミを拾うこと、学生の落とし物を大学に届けることをしています。清掃時には、学生が授業を受けやすい環境作りを心掛けています。また、イヤホンや授業の資料などの落とし物を届けることで、私たちの活動が多くの学生の役に立っていると考えています。校舎外の清掃活動では、学年毎に大学内の決められた道を歩き、落ちているゴミを



拾っています。傘などの大きなものからペットボトルや空き缶などの小さなものまで、様々なゴミを手分けして拾っています。

今年度、新型コロナウイルスの影響により対面授業は少なくなりましたが、未だに大学内には一定のゴミが落ちている状況です。これはとても悲しいことです。そのため、私たちラグビー部は今後もこの活動を続けていきたいと思っています。そして、私たちの清掃活動に多くの学生が共感し、大学内のゴミがゼロになることを願っています。

国際教育棟におけるリサイクル

国際企画課 / 北 絵理子



令和2年4月より国際教育棟にて日本人学生と留学生が混住する学生寮での生活がはじまりました。日々の生活をともにするうちに日本での生活に慣れていない留学生は「資源をリサイクルする為にゴミの分別が必要」であることを日本人学生から教えてもらい、日本での廃棄方法や自国との生活習慣の違いに気づいていったようです。例えばペットボトルの廃棄に関して「ラベルとキャップ：プラスチックゴミ」「ボトル：ペットボトル」のように1つの物を複数に分別する必要がなかった国は多くあるようです。

そしてこのようなことから持続可能な社会になる為に「身近にあってすぐできることはなんだろう」と日本人学生と一緒に考えるようになったと言います。

また、国際教育棟に住む留学生は複数の国から来ていることもありそれぞれの国での取り組みについて知ることでもできたそうです。

このようなことから「細かい分別が必要なのはわかったけれど、どうやって分別したらよいかよくわかりません。」という意見が出たので留学生と日本人学生のリーダーと一緒に分別ルールについて日本語と英語の

ガイドラインを作成しました。

回収日はもちろん、刈谷市ではどの袋に入れるとリサイクルできるかを説明しています。

そして購入した商品についているマークを知ることでも分別がわかることも表しています。

これからの社会を担う彼らが自分たちで環境に関する一番身近なゴミについて考え、行動する事は持続可能な社会への第一歩。今後も学生たちの気づきと行動を国際企画課でサポートしていきたいと思っています。



ガイドライン (回収日カレンダー)



ガイドライン (回収袋の案内)

全学FD講演会「SDGsセミナー」

地域連携センター・教職キャリアセンター



10月28日(水)、宮城教育大学の市瀬智紀教授を講師として招き、全学FD講演会「SDGsセミナー ESD/SDGsに教員養成大学が取り組む意義」を開催しました。

国連は2030年までの達成目標「SDGs誰も取り残さない」を掲げ、持続可能な社会の構築を目指しています。本学は大学、附属学校とも国内のESDの推進拠点であるユネスコスクールとして登録されており、2012年からは愛知県内のユネスコスクール支援大学間ネットワークに加盟して、県内のユネスコスクール活動を支援する役割を担っています。今回の講演会は、新しい学習指導要領に「持続可能な社会の担い手」となることが明記され、教科書にも記載される中、教員養成大学としてどういう役割を果たしていくべきかの認識を深めるために、SDGsの第一人者である市瀬先生をお招きしたものです。対面、オンラインをあわせて119人が参加し、このテーマに対する関心の高さがうかがえました。

講演で、市瀬先生は、まず「持続可能な開発」の定義に関して、2019年にグレタ・トゥーンベリさんが国連のサミットで行った、現役世代が資源をむさぼり次世代に伝えられないことを批判したスピーチを引用し、「環境資源の有限性」と「次世代への公平性」の説明をされました。そして、ESDとSDGsの考え方が世界や日本でどのように広まっていったかについて解説されました。現在、SDGsは多くの教科書で取り上げられており、大学入試でも、教科に分断された知識ではなく、主体的に諸課題に

取り組む力を評価する出題が行われたり、高校の課題研究がSDGsの枠組みを使って実施されたりと、SDGsが学校・大学教育に浸透してきていることが示されました。しかし、長年のESDの取り組みの成果は「地域や生徒同士のつながり」や「コミュニケーション」として表れているものの、それが本来の目的である世の中や社会の変革にはつながっておらず、2019年に国連で採択された「ESD for 2030」では行動レベルでの変革を促す必要性が提示されていることが課題として説明されました。



講演する市瀬先生

ESD/SDGsのこれまでの経緯から、現状、そして課題までを丁寧に分かりやすくご説明いただき、理解が深まった有意義な講演会となりました。



講演会場の様子

愛知県・一宮市共催事業「Let'sエコアクションin AICHI」への協力

地域連携課 / 石垣 果恋



11月28日(土)、一宮市の尾張一宮駅前ビル3階シビックテラスにて開催された環境イベント「Let'sエコアクションin AICHI～ふみだそう! 未来へつながるエコアクション～」に本学もブース出展を行いました。

本イベントでは県内の企業やNPO団体が環境やSDGsに関する活動を紹介するブース出展を行う中、理科教育講座大鹿聖公研究室ならびに学生団体SAGAによるSDGsや環境保全に関する教育プログラムの実演体験の提供を行いました。

子どもから年配の方まで多くの来場者に環境の大切さや「SDGsとは」を体験していただきました。



すごろくゲーム



生き物パズル



愛知県ユネスコスクール指導者研修会を開催

本学は、平成24年1月にユネスコスクール支援大学間ネットワーク (ASPUnivNet) に加盟し、以降、愛知県内の学校のユネスコスクール加盟申請及び加盟校の活動に係る支援を実施しています。また、大学としても、平成24年12月にユネスコスクールに加盟し、エコキャンパスの展開、科学・ものづくり教育の推進、国際交流活動等の実施により、ユネスコの推進するESDに関わる活動を推進しています。

活動のひとつとして、2020年10月17日(土)、名古屋市内のウィルあいちにおいて、「愛知県ユネスコスクール指導者研修会」を開催しました。本研修会は、ユネスコスクール活動支援の一環として毎年開催し、愛知県内のESD活動の一層の推進を図るため、ユネスコスクール先進校による実践活動報告や互いの情報交換等の機会を提供し、ユネスコスクール間のネットワーク作りを支援するとともに、未加盟校においてはESD活動を始めるきっかけづくりになることを目的としています。

今年度は愛知県教育委員会が主催する愛知県ユネスコスクール交流会と同日、同会場で開催しました。また、新型コロナウイルス感染症感染予防のため、オンライン参加

地域連携課/島村 瑞穂

と会場参加を併用するハイブリッド式で開催しました。文部科学省国際統括官付国際統括官補佐の堀尾多香氏による「ESDの推進とユネスコスクールへの期待」と題した講演のほか、県外4校の先進校と附属学校から各校のESD活動について、分科会方式で実践発表を行いました。



講演の様子



後援者・発表者による記念写真



生協学生委員会「社会組」の環境への取り組みについて

愛知教育大学生協学生委員会 (GI)



生協学生委員会では「環境組」改め、“社会問題や平和・環境問題”について考える「社会組」を設置し、理想に近づけるよう、現状に合わせて活動を行っています。

先日は生協フェスタを開催し、店舗組、共済組、社会組の3つの組でそれぞれ様々な企画を行いました。中でも、社会組「ペットボトルモザイクアート」の企画を行いました。

ペットボトルキャップをワクチンに利用するため、組合員の方々にペットボトルキャップを持ち寄っていただきました。また、希望者には自分でキャップを貼り付けてもらうといった活動を通じてペットボトルキャップでモザイクアートも作成しました。たくさんの方が持ち寄ってくれたため、モザイクアート作成にあたっての必要数を大きく上回る、非常にたくさんのキャップを回収することができました。

また、生協フェスタ以外では、主に「ミンミリパック」の回収を行っています。ミンミリパックは回収率の低さを課題としています。特に昨年度入学した学生は大学に登校する機会が非常に少なく、今年度入学した学生であっ

てもオンライン授業と対面授業のハイブリッド型の展開が続いているため、ミンミリパックの存在を知らない組合員も多くいます。

社会組ではミンミリパックの周知や協力を促すため、ミンミリパックのフィルムをはがす様子を実際に撮影して、画像だけでなく動画での投稿をSNSで行うなどの工夫を行っています。



ペットボトルモザイクアート



SNSでのミンミリパック投稿

令和2年度の生協店舗・食堂での環境配慮の取り組みについて

愛知教育大学生協同組合



生協では、組合員の皆さんに食堂や店舗をご利用いただく中でも、環境に配慮した消費に参加できる仕組みづくりに取り組んでいます。

既に定着している主な活動は、レジ袋削減です。生協は、刈谷市のごみ減量化推進会議とともに「刈谷市におけるレジ袋削減に関する協定」を提携しており、購買店舗でのレジ袋配布は原則行っておらず、必要な方には有料(1枚5円)で購入いただいています。生協への声カードに「レジ袋を置いてほしい」という声をいただくことありますが、レジ袋削減の目的で有料化していることをご説明し、環境配慮への理解、ご協力をいただけるよう回答しています。令和2年度のレジ袋購入者は1年間の来店数約8万6千人中、665人で、レジ袋辞退率は、99.2%となっています。

もう一つの日常活動は、購買コンビニで販売する丼パックの回収です。購買コンビニで販売する丼には、「ミンミ・リ・リパック」(通称 ミンミリパック)という再生・再資源化が可能な容器を採用し、リサイクル、省資源化に役立っています。令和2年度は新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、利用が大きく減少しておりますが、生協学生委員会も「生協フェスタ」の機会などを利用してミンミリパックの回収を呼び掛けるなど、引き続き回収に努めています。

大学生協では、毎年「全国環境セミナー」を開催しており、全国の大学生協組合員の環境活動への取り組みを学び合っています。愛教大生協からも毎年、学生委員会から代表参加者を派遣し、学内での環境活動へのヒントに役立てています。

生協の日常の店舗運営でも、省資源、リサイクルの取り組みを行っています。食堂で出る廃食は回収してリサイクルしています。廃食油はバイオディーゼルエンジンの燃料(BDF)としてリサイクルされ、トラックなどの燃料として利用されます。また学内の店舗や自動販売機で利用、排出されたペットボトルは、生協が回収し、リサイクルに活用していますが、その費用(環境協力金)は生協が負担しています。



ミンミリパックのリサイクル方法を示すポスター



食廃油からBDFを抽出

環境配慮の仕組みとその運用

環境保全と推進体制



法令遵守状況

法令	大学の体制・規程等	大学の具体的な対応 (例)
【環境】 ・環境配慮促進法 ・環境配慮契約法 ・地球温暖化対策の推進に関する法律 ・エネルギーの合理化等に関する法律 ・グリーン購入法	エネルギーの使用の合理化に関する規程	・環境報告書の作成・公表 ・環境活動の実施
【水質】 ・水質汚濁防止法 ・下水道法	水質汚濁防止規則 化学物質管理委員会規程	・毎週・窒素及びリンの測定 (井ヶ谷地区) ・BOD 毎月測定
【大気】 ・大気汚染防止法		・ばい煙測定 (Nox・Sox・ばい煙等)
【騒音・振動】 ・騒音・振動規制法		・冷凍機等設備 (送風機) の届出 ・建設工事時に低騒音型重機の使用
【廃棄物】 ・廃棄物の処理及び清掃に関する法律 ・ダイオキシン特定処置法 ・ポリ塩化ビフェニル廃棄物の適正な処理の推進に関する特別措置法	化学物質の廃棄物処理規則 化学物質の廃棄物処理細則 化学物質管理委員会規程 放射性有機廃液焼却要項	・特定管理産業廃棄物管理責任者の選任 ・産業廃棄物・特定管理産業廃棄物のマニフェスト管理及び報告 ・PCBの適正保管及び適正処分 ・処理業者の調査票を作成し適正業者の選定 ・処理施設の現地調査実施 ・ごみ分別の徹底・卒業時のごみ対策
【防災・防火・危険物】 ・大規模地震対策特別措置法 ・消防法 [危険物の規制に関する政令]	防災・防火管理規程	・(年1回) 防災・防火訓練時に消防設備の説明 ・備蓄倉庫の点検 ・大学祭模擬店への燃料安全指導 ・危険物屋内貯蔵所の安全管理
【放射性物質】 ・放射性同位元素等による放射線障害の防止に関する法律 ・核原料物質、核燃料物質及び原子炉の規制に関する法律	エックス線障害予防防条例 エックス線障害予防委員会規程 核燃料物質計量管理規程	・講演会の実施 ・健康診断の実施
【高圧ガス】 ・高圧ガス保安法		・ボンベ管理の強化 ・液体窒素貯槽利用者保安講演会の実施
【実験】 ・遺伝子組換え生物等の使用等の規制により生物の多様性の確保に関する法律 ・動物の愛護及び管理に関する法律	遺伝子組換え実験安全管理規程 遺伝子組換え実験安全委員会規程 研究倫理規程 動物実験規程、動物実験委員会規程	・封じ込め状況の確認 ・二種使用についての審査
【安全衛生】 ・労働基準法 ・労働安全衛生法 ・学校保健安全法	安全衛生管理規程 安全衛生委員会規程	・産業医・衛生管理者の構内巡視・施設改善 ・アスベスト含有建材のリスク管理、及び適正撤去 ・附属学校の VOC 測定支援
【化学物質】 ・消防法 ・毒物及び劇物取締法 ・労働安全衛生法 ・PRTR法 (特定化学物質の環境への排出量の把握等及び管理の改善の促進に関する法律) ・農薬取締法 ・水銀による環境の汚染の防止に関する法律	化学物質管理規程 化学物質管理委員会規程 化学物質管理支援システム取扱要項	・化学物質管理に関する調査 (毒物・劇物等) ・化学物質管理支援システムの運用推進 ・化学物質管理に関する調査及び講習会の実施

3

サステイナブルキャンパスを
目指して



AUE スクエアと建物群

温室効果ガスCO₂排出量の経年比較

表 温室効果ガスCO₂排出量の経年比較

年 度	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度
温室効果ガスCO ₂ 排出量(t-CO ₂)	3,244	3,017	3,104	2,906	2,615	2,133
建物面積(m ²)	127,905	127,905	127,905	127,905	127,905	129,446
t-CO ₂ /建物面積(m ²)	0.0254	0.0236	0.0243	0.0227	0.0204	0.0165
前年度との比較	-8.0%	-7.0%	2.9%	-6.4%	-10.0%	-19.4%
2014年度との比較 (第3期中期目標・中期計画期間)	-8.0%	-7.0%	-4.3%	-10.4%	-19.4%	-35.0%

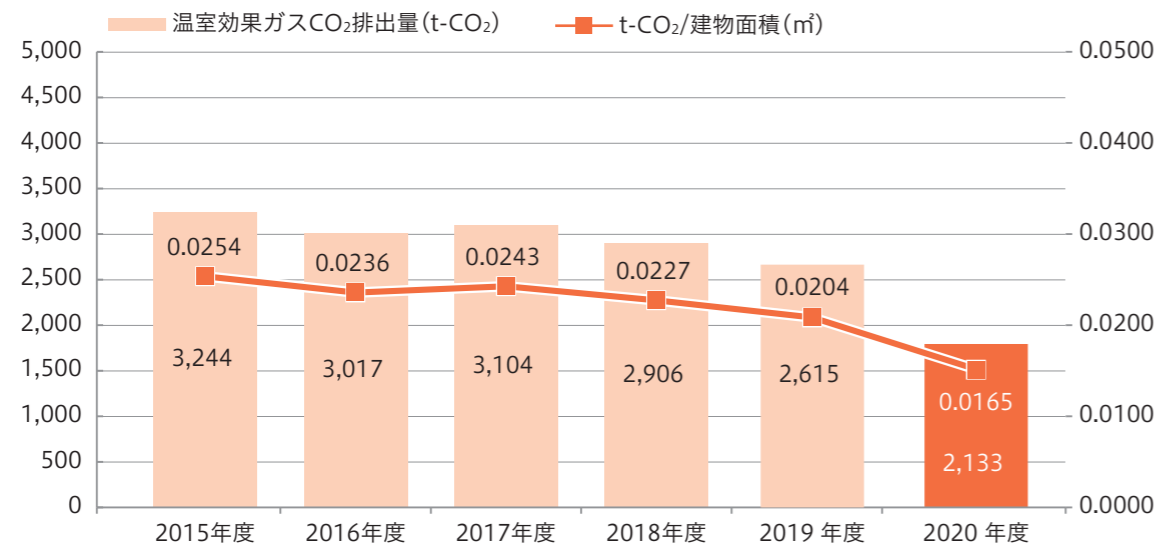


図 温室効果ガスCO₂排出量の経年比較(過去6年間)

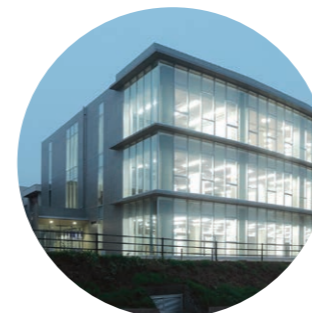
省エネに向けた活動状況

省エネルギー対策について省エネ啓発活動を行い、節電意識を呼びかけました。また、省エネに関する取り組みや豆知識を「省エネニュース」として作成し、教職員・学生が必ず目につくトイレに掲示しました。



冬季省エネニュース

夏季省エネニュース



LED照明



高効率空調



太陽光発電機

環境負荷状況と低減対策（マテリアルバランス）

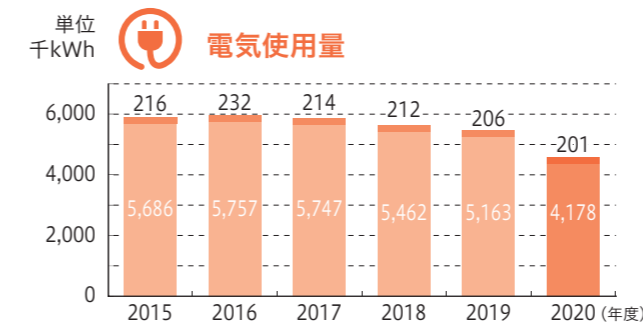
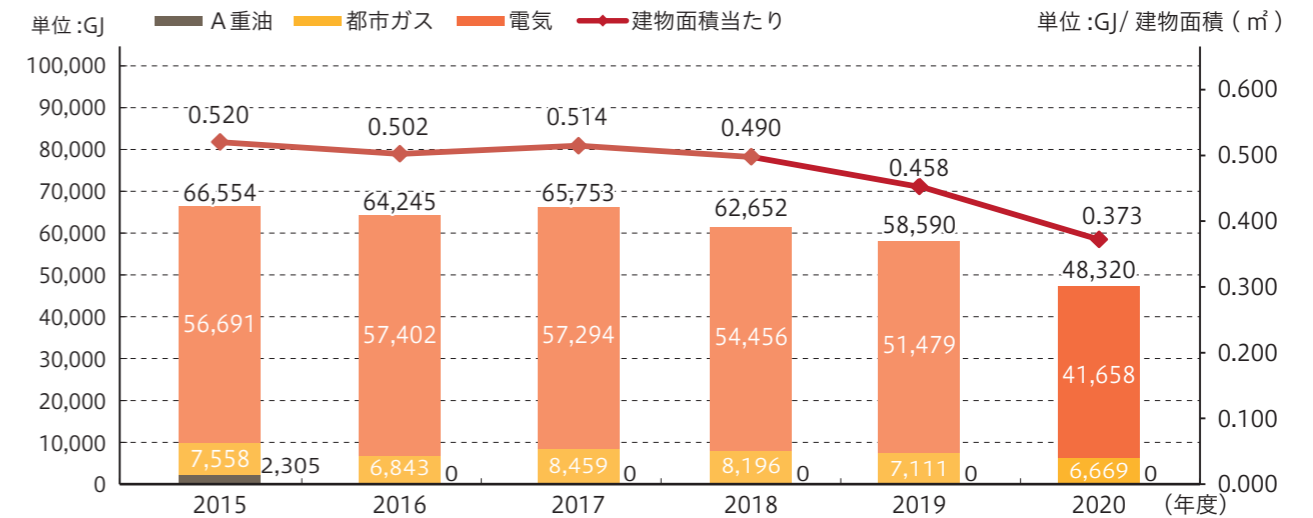
本学の2020年度におけるマテリアルバランスを下図に示しました。

事業活動（教育、研究、課外活動等）のために使われたエネルギーや資源の量をINPUT（投入量）、事業活動の結果、外部に排出された環境負荷物質や廃棄物等の量をOUTPUT（排出量）として示しています。



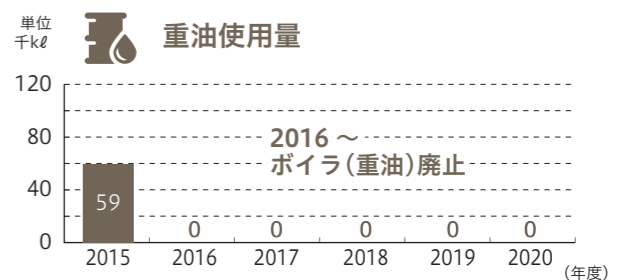
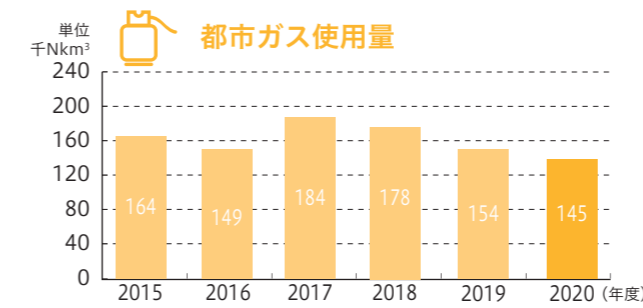
総エネルギー投入量及び低減対策

本学が教育研究活動で使用するエネルギーは、電力、化石燃料（都市ガス）です。これらの使用量を発熱量に換算し、合計した総エネルギー投入量を以下のグラフに示します。



太陽光発電 201千kWh
4,379千kWhの内 201千kWhは太陽光発電による自然エネルギーです。

2015年教育交流館に太陽光発電 10kW を設置
2014年教育未来館に太陽光発電 10kW を設置
2013年本部棟に太陽光発電 12.5kW を設置



総エネルギー投入量の低減対策

- 省エネルギー型機器の導入
- 昼休みのパソコン電源オフ、帰宅時のプリンター等電源オフ・電源スイッチ付コンセントの利用
- 夏季における「クールビズ」、冬季における「ウォームビズ」の励行
- 冷暖房中の窓、出入口の開放禁止
- ブラインドやカーテンの利用
- エアコンフィルターの清掃
- 発熱の大きいOA機器類の配置の工夫
- 暖房便座のふた閉めの徹底、非暖房期には便座への通電は行わない
- 木曜日の定時退庁・業務効率化による残業の削減
- 昼休み・夜間・休日は、業務上必要最小限の範囲を除き消灯
- 職員に対する階段利用の奨励
- 冷蔵する物品の量を適切な範囲にとどめる
- 省CO₂化の要素を考慮した使用電力購入
- 夏季一斉休業

1 2 3 4 グリーン購入の推進状況



○グリーン調達目標

環境物品等の調達の推進等に関する法律（グリーン購入法）に基づき、環境負荷の低減に資する製品等の調達の推進を図るための方針を策定し、調達率100パーセントを目標としています。

○グリーン調達の状況

本学のグリーン購入法による環境負荷低減の製品・サービスなど(特定調達品目)は、21分野280品目となり、主な分野の調達量・達成率は、以下のとおりです。達成率は、すべて100パーセントになりました。今後もグリーン調達を推進していきます。



○グリーン調達の実績(主要品目抜粋)

表 2020年度主要品目グリーン調達実績

分野	品目	全調達量	特定調達品目調達量	調達率
紙類	コピー用紙	17,145.5 kg	17,145.5 kg	100%
	トイレトペーパー	1,434.0 kg	1,434.0 kg	100%
文具類	ファイル	15,505 冊	15,505 冊	100%
	事務用封筒(紙製)	49,971 枚	49,971 枚	100%
オフィス家具等	いす	422 脚	422 脚	100%
	机	188 台	188 台	100%
OA機器	パーソナルコンピュータ	2,718 台	2,718 台	100%
	スキャナ	16 台	16 台	100%
照明	LED照明器具	1,075 台	1,075 台	100%
	電球形状のランプ	3 本	3 本	100%
インテリア・寝装寝具	カーテン	35 枚	35 枚	100%
役務	印刷	54 件	54 件	100%

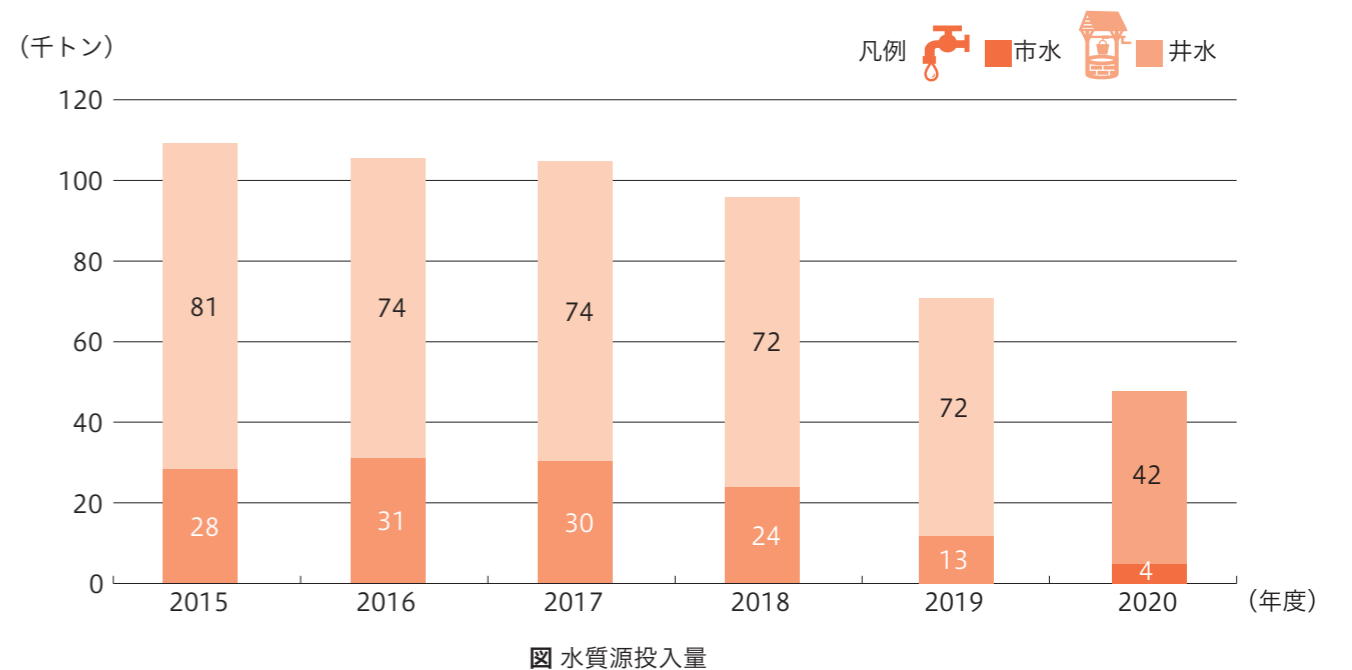
水資源投入量及び低減対策



表 水資源投入量

年度	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度
投入量(市水)(m³)	28,374	31,227	30,429	24,042	13,194	4,358
投入量(井水)(m³)	80,844	74,314	74,293	71,759	71,519	42,396
投入量計(m³)	109,218	105,541	104,722	95,801	84,713	46,754
対前年度差(m³)	9,381	-3,677	-819	-8,921	-11,088	-37,959
対前年度比(%)	9.4%	-3.4%	-0.8%	-8.5%	-11.6%	-44.8%

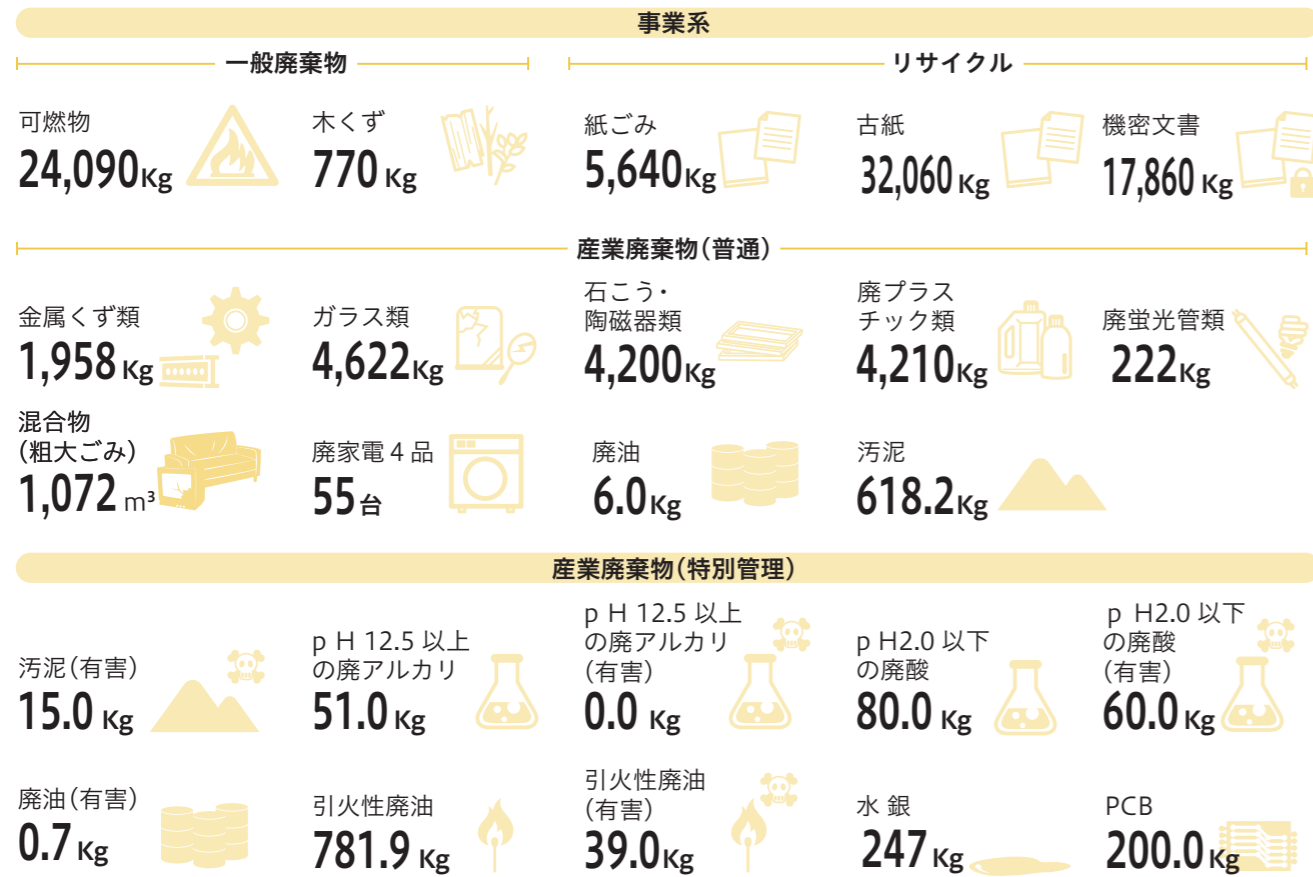
(千トン)



本学の給水使用量は、便所等の節水工事や節水啓発活動、定期的な漏水監視に加え、新型コロナウイルス感染症拡大防止による遠隔授業等の実施の影響より、減少傾向になっています。

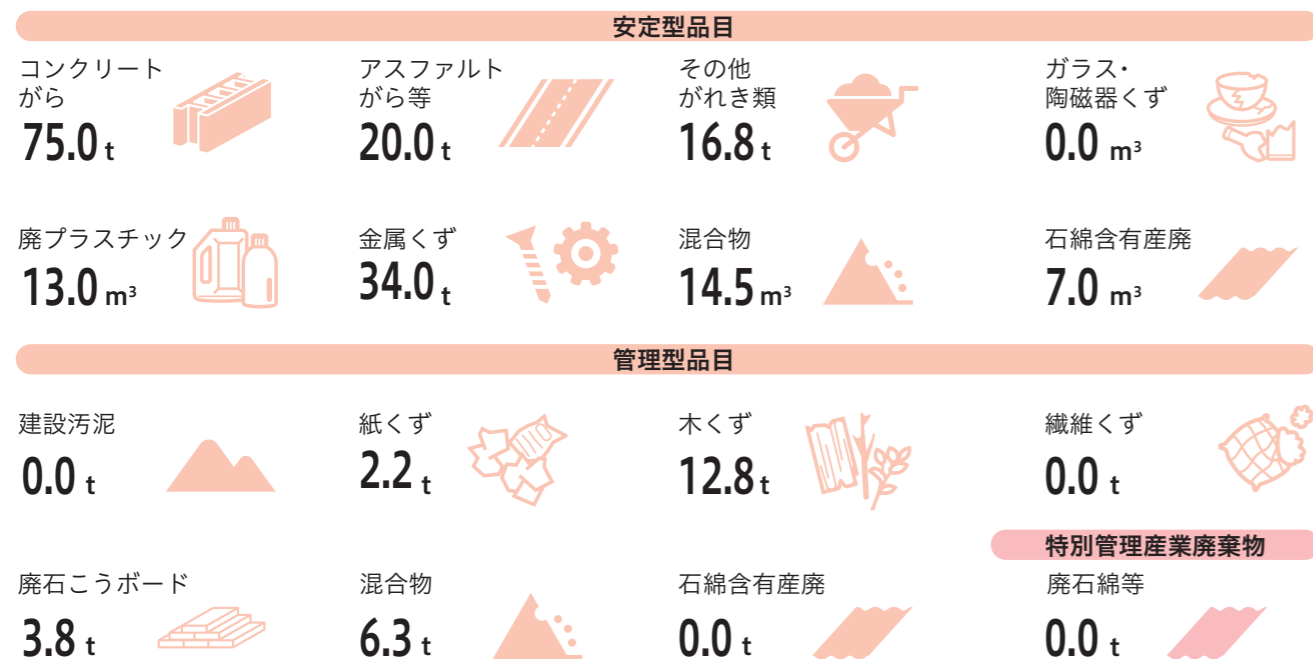
1 廃棄物排出状況

○大学からの廃棄物



※廃棄物は分別回収を行い、ごみの減量化対策を行っています、またリサイクル率を毎年増加させるように推進しています。

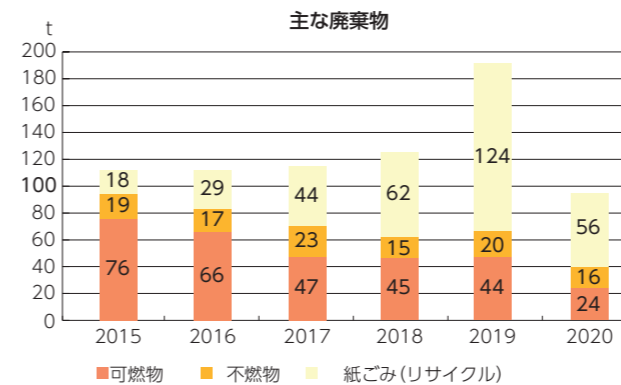
○大学内建設工事関連による廃棄物



※工事にて発生した廃棄物も manifests により、適切に管理しています。

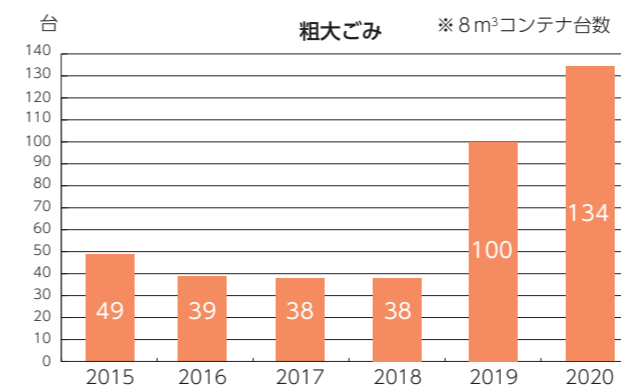
2 ごみ排出量及び低減対策

○ごみ排出量



可燃・不燃物の排出量は、建物の大型改修工事に伴う引越作業により増減しますが、リサイクルできる紙ごみを分別したことにより、減少傾向になっています。

また、紙ごみの排出量については、前述の取り組みによって、増加傾向となっておりますが、リサイクルをすることで対応しています。

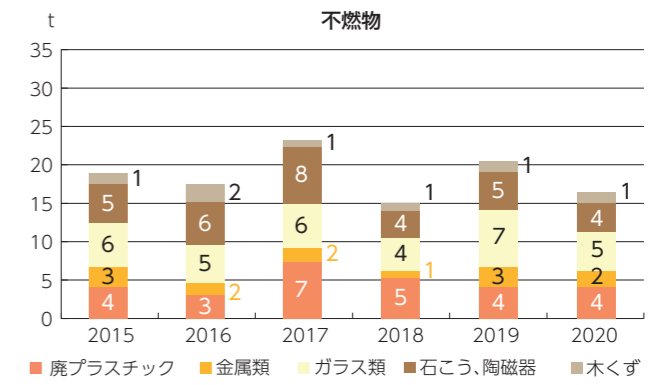


粗大ごみの排出量は、建物の大型改修工事に伴う引越作業により増減しますが、倉庫に一時保管するなど、必要に応じて処分しているため、年ごとの排出量にばらつきが生じています。

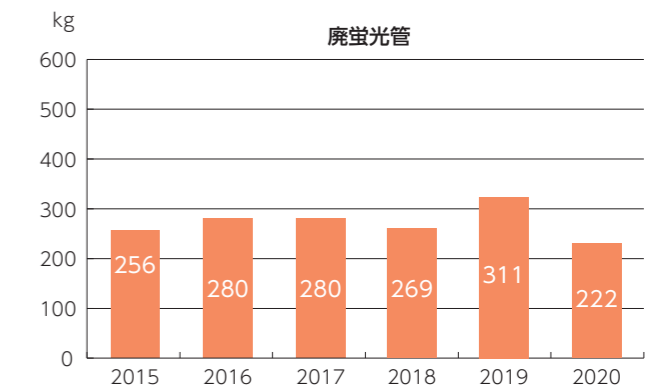
○低減対策

発生抑制(リデュース)、製品及び部品の再利用(リユース)、再生利用(マテリアルリサイクル)、熱回収(サーマルリサイクル)を基本的な方針として対策を行っています。主な対策事例として下記の様な取り組みを行っています。

- 紙ごみについては、古紙(売り払い)、雑古紙、機密文書・廃棄図書(3種類)に区分し、紙の状況及び性質に応じて排出リサイクルされます。また、学内において紙媒体にプリントアウトする場合は、両面印刷、集約印刷及び裏紙使用を推進し省資源化に努めています。
- ペットボトル、カン類及びビン類は、リサイクルのために分別したうえで排出しています。
- 粗大ゴミは排出前に倉庫に一時保管し、物の状態に応じてリユースをしています。また廃棄物の適切な処理の促進に関する条例(愛知県)に基づき、法律遵守の観点から排出者の義務として、適宜、処分場において実地確認をしています。
- 廃棄する蛍光管類は一カ所に集積したうえで排出し、最終的に水銀、ガラス原料としてリサイクルされます。



教育大学である本学には、美術・技術系の講座も設置されています。そのため、金属くず、ガラスくず、木くず等の排出が比較的多くあります。これらを分別したうえで排出し、最終的に金属原料、ガラス原料等になり、木くずは製紙原料や補助燃料として利用されています。



廃蛍光管の排出量は、蛍光管の寿命に大きく影響されます。蛍光管の寿命は約4~5年であり、廃蛍光管の排出量もそのサイクルで増減すると推測されます。

1 水質汚濁防止への取組状況と管理

学内からの排水は、関係する法令および自治体が定める水質基準にしたがって管理し、実験系排水については、pHの常時監視を行っています。

○下水道への接続

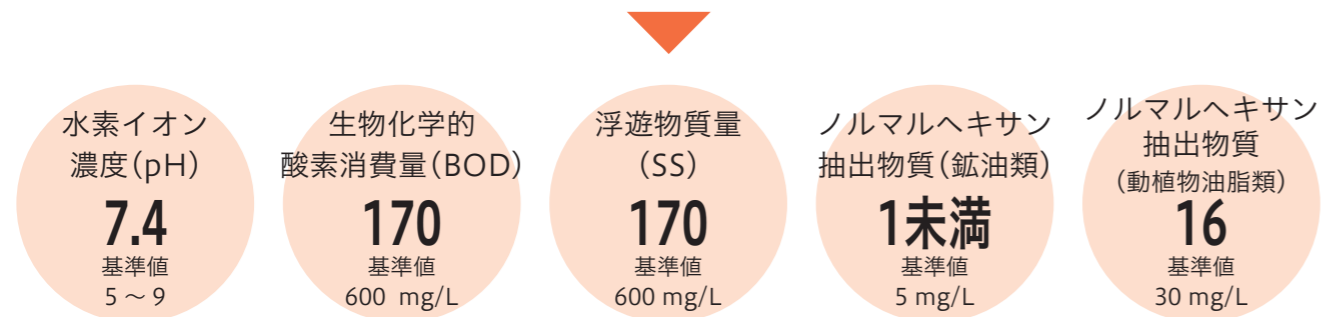
メインキャンパス（刈谷地区）の排水は、2016年6月まで学内の生活排水処理施設で浄化した後、河川（境川）へ放流していましたが、2016年7月からは刈谷市の公共下水道に接続し排水しています。

○水質汚濁物質の測定結果

2020年度の水質測定結果は、以下のとおりです（一部抜粋）。基準値の超過はありませんでした。



中和処理施設（pH常時監視）により実験系排水を管理



2 大気汚染防止への取組状況と管理

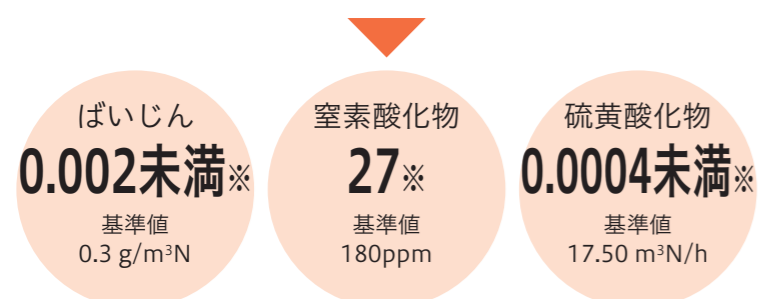
学内の一部の空調設備に冷温水発生機を使用しており、ここで排出される大気汚染物質は、関係する法令の基準にしたがって管理し、大気汚染の防止に努めています。

○講堂(冷温水発生機)のばい煙測定

講堂の冷温水発生機から排出されるばい煙を年1回測定し、大気汚染物質を管理しています。

○大気汚染物質の測定結果

2020年度の大気汚染物質の測定結果は、以下のとおりです。基準値の超過はありませんでした。



※本学のばいじん、窒素酸化物、硫黄酸化物は、計測値



冷温水発生機（講堂）

3 化学物質取扱状況と管理

愛知教育大学では、毒物及び劇物取締法、PRTR法、労働安全衛生法、消防法、廃棄物の処理および清掃に関する法律、および水質汚濁防止法について対象とした化学物質管理規程に基づき、環境リスク・安全リスク・健康リスク低減を目指した化学物質管理を行っています。化学物質管理規程に基づき、化学物質管理支援システムTULIPを活用しています。各研究室の適正管理を支援推進し、化学物質管理に関わる業務担当についてマニュアル化を図りました。2020年度は、新型

コロナ感染症対策として消毒用エタノールが大量に使われる中、本学の理化学系実験実習のメイン建物である自然科学棟の全面的な改修工事のために化学物質を取り扱う教育研究活動の自粛となり、例年とは全く異なる取り扱い状況を示しました。また、引越し作業に伴う試薬等の棚卸や整理整頓が進み、不用試薬として大量の化学物質が廃棄処分されました。本頁では、2020年度の取扱量の上位5物質について、過去5年間の学内取扱量とともに掲載しました。

表 化学物質取扱状況と管理

(単位: kg)

名称	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	労働安全衛生法	消防法	毒物及び劇物取締法	PRTR法
エタノール	78	57	48	20	16	381	名称を通知すべき有害物	第四類危険物 アルコール類水溶性液体	-	-
グリセリン	3	-	3	3	-	25	-	第四類危険物 アルコール類水溶性液体	-	-
ジクロロメタン	87	166	122	57	23	19	特定第二類物質 特別管理物質 特別有機溶剤 名称等を通知すべき有害物	-	-	第一種指定 化学物質
スチレン	-	-	-	-	55	15	特定第二類物質 特別管理物質 特別有機溶剤 名称等を通知すべき有害物	第四類危険物 第二石油類非水溶性液体	-	第一種指定 化学物質
メタノール	187	198	198	218	127	11	第二種有機溶剤 名称等を通知すべき有害物	第四類危険物 アルコール類水溶性液体	劇物	-

PCB廃棄物の処分状況

本学におけるポリ塩化ビフェニル（PCB）廃棄物は、改修工事に伴い実験機器等で使用されていたコンデンサから低濃度PCB汚染物が新たに発見されました。低濃度PCB汚染物については発見次第処分を行う予定となっています。

高濃度PCB汚染物については、「ポリ塩化ビフェニル廃棄物の適正な処理の推進に関する特別措置法」により、変圧器・コンデンサー等に含まれるものについては2022年3月31日までに処分を行う必要があります。本学には、高濃度PCB汚染物であるコンデンサーが一部残っておりますが、2021年度中に処分をする予定となっています。



その他の活動状況

○労働安全衛生

教職員が、安全で健康に働ける職場づくりは、充実した教育・研究活動の基礎です。本学は、教職員が快適に安全に働くことができる大学づくりを目指して、衛生管理者養成、健康診断、ストレスチェック、喫煙、メンタルヘルス、職場巡視、作業環境測定、労働災害率に関する改善等に取り組むために労働安全衛生活動計画を策定しました。

また、本学における労働災害発生状況の推移は表のとおりで、2020年度の労働災害は、休業災害0、不労災害7人で、労働災害度数率は5.30、強度率は0でした。2020年度の全産業の度数率（不労災害も含む）は、1.95、強度率は0.09で、本学は、強度率は全産業より低値という結果となりました。災害発生について原因を調べ、再発予防措置を講じ、災害発生数の減少を目指します。



表 労働災害発生状況

	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度
休業災害	0	0	0	0	0	0
不労災害	8人	7人	5人	5人	5人	7人
災害合計	8人	7人	5人	5人	5人	7人
労働災害度数率(*)	6.06	5.30	3.79	3.79	3.79	5.30
労働災害強度率(**)	0	0	0	0	0	0

(注) *は百万延べ労働時間当りの労災人数。**は千延べ労働時間当りの労災休業延べ日数

○人権及び雇用

ハラスメント規程を定め、人権侵害に関する相談窓口を設けて、担当者が相談を受けています。2020年度の相談は6件、ハラスメント防止委員会での審議は0件であり、関係者の処分は0件でした。障害者の雇用は常勤5人、非常勤5人で、能力を活かした就労ができるように積極的に進めています。

○美化活動

花プロジェクト

「花プロジェクト」は2012年1月から、大学構内の環境美化の一環として施設課の若手職員を中心に取り組み始めた活動で、今回で第20回となりました。当日は新学長である野田学長が駆けつけてくださり、快晴のなか学生、職員あわせて約40名で、抜いても抜いても生えてくる雑草と格闘しながらも交流を深め、楽しく構内にある花壇の植栽や草取りを行いました。

今回植えた花苗はビオラ約680株で、これからの寒い時期でも構内の雰囲気明るくなるよう、暖色系の黄色やオレンジの花を選びました。

バスを下車し大学へ向かう途中の花をみて、少しでも笑顔になってもらえるよう、これからも活動を続けたいと思います。



挨拶する野田学長



ビオラを植栽する野田学長（左）と後藤理事（右）



第二福利施設にビオラ植栽



4

さいごに

環境報告書まとめ 環境報告ガイドライン2018との対照表

頁	環境報告書2021	環境報告ガイドライン(2018年度版)による項目
1	目次	-
2	学長メッセージ	【2】1.経営責任者のコミットメント
3	環境方針、環境目標・計画	【2】7.長期ビジョン 【2】8.戦略 【2】9.重要な環境課題の特定方法
【1】はじめに		
5	報告対象範囲・対象期間、沿革の略図	【1】1.環境報告の基本的要件 【2】5.ビジネスモデル
6	キャンパス概要	【2】5.ビジネスモデル
【2】教育大学としての特色を活かした環境活動		
9		
10		
11		
12		
13		
14		
15		
16	持続可能な発展目標(SDGs)とその取組	【2】3.ステークホルダーエンゲージメントの状況
17	環境に関する教育・研究・地域貢献	【2】10.事業者の重要な環境課題 【3】3.生物多様性
18		
19		
20		
21		
22		
23		
24		
25	環境配慮の仕組みとその運用	【2】2.ガバナンス
26	法令遵守状況	【2】4.リスクマネジメント
【3】サステナブルキャンパスを目指して		
27	温室効果ガスCO ₂ 排出量の経年比較	【1】2.主な実績評価指数の推移
28	省エネに向けた活動状況	
29	環境負荷状況と低減対策(マテリアルバランス)	【3】1.気候変動
30	総エネルギー投入量及び低減対策	
31	グリーン購入の推進状況	【2】6.バリューチェーンマネジメント
32	水資源投入量及び低減対策	【3】2.水資源
33	廃棄物排出状況	
34	ごみ排出量及び低減対策	【3】4.資源循環
35	水質汚濁防止への取組状況と管理・大気汚染防止への取組状況と管理	【3】6.汚染予防
36	化学物質取扱状況と管理・PCB廃棄物の処分状況	【3】5.化学物質
37	その他の活動状況	【2】4.リスクマネジメント
38		
【4】最後に		
39	ガイドライン2018との対照表	
40	外部評価意見	

外部評価意見

一般社団法人 SDGs コミュニティ代表理事 新海 洋子

「キャンパスまるごとSDGs」。本報告書を開いた瞬間に感じたことです。環境報告書ではなく、「SDGsレポート」もしくは、「ESD for 2030 レポート」という名称にしてもよいほどの、「教育」大学によるSDGs達成に向けての取組みが掲載されていました。

各取組みのエッセンスがP10～P24 に紹介されており、特に目を引いたのが、幼児教育、特別支援教育、付属小学校・中学校・高校での実践、学生の活動です。

触れる・聴くなどの五感を大切に体験学習、多文化・環境・国際交流・市民教育といった分野、技術科・英語科・社会科・算数科・理科・美術教育・保健教育といった教科、部活・サークル・生協活動等の学生の積極的参加に見られる活動、行政や企業・学生の協働による学びあいなど、多岐にわたる実践でした。

このホリスティックな学びが、地域の、愛知県のモデルとして汎用されること、この取組みが核となって、愛知県の中小高校、大学、あらゆる世代、主体の

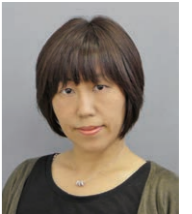
学びの場で展開されること、企業や地域との連携により、SDGs目標の達成がより近くなる学びへと広がり深まっていくことが貴大学の次の役割だと捉えています。

少し厳しいことを言えば、この取組みを学内だけでとどめておいてはいけません。学内だけでなく、研究会や研修などを通じて、貴大学の教員がより地域に向き、実践成果を伝え、多様な現場で活用できるように牽引していただきたい。企業や地域と教育現場の接点、つなぎ役であっていただきたい。そしてこれら連携によって生まれた学習成果や効果を発信して、改善をしつつ、学びのPDCAをまわしていただきたい。

この実践は、今後の地域社会に必須の学びです。求められている内容、手法、場づくりです。そして、現場のニーズを踏まえた展開は、学習者、教員、教育関係者の変容につながります。期待しています。

プロフィール

大学卒業後、財団法人名古屋YWCAに就職。その後、NPO法人中部リサイクル運動市民の会に就職し環境教育事業担当。1999年国連大学・環境省が設置する地球環境パートナーシッププラザに就任。NPO法人ボランタリーネイバーズに就職し、2005年9月～2018年3月まで環境省中部環境パートナーシップオフィス、2007年中部地方ESD活動支援センターで中部7県のESD事業等に取組む。2019年に一般社団法人SDGsコミュニティ設立。特定非営利活動法人持続可能な開発のための教育推進会議理事。



名古屋市環境局長 勝間 実

気候変動や生物多様性の保全、資源の持続可能な利用といった環境課題は、地球規模で人やモノが移動する現代社会において、経済・社会課題とも複雑に絡み合っており、深刻さを増しています。このような背景から、2015年に環境・経済・社会の3側面を不可分のものとして調和させるため、持続可能な開発目標(SDGs)が採択されました。

SDGsに掲げられている広範な課題を解決していくためには、産学官民にわたる多様な主体の協働が欠かせません。

名古屋市においては、令和元年7月に「SDGs未来都市」に選定されたことを受け、環境に関する産学官民の協働のプラットフォームである「なごや環境大学」に「SDGs未来創造クラブ」を新たに設置し、取組を進めております。

とりわけ、未来の持続可能な社会の担い手の育成を

目的とした「人づくりプロジェクト」では、愛知教育大学理科教育講座大鹿研究室の皆様との協働により、小学生のSDGs学習プログラムを新たに整備いたしました。

本報告書においても、SDGs学習プログラムのうち、「SDGsフィールド」及びワークシートについて触れて頂いておりますが、愛知教育大学の教育に関するノウハウを反映させることにより、名古屋市内の小学生はもとより、市内外を問わず多くの学校・企業にもご活用頂けるものとなり、SDGsの浸透に大いに貢献しています。

2030年のSDGs達成に向けては、多様な主体の協働が今後益々重要になってまいります。SDGs達成に向けた協働の環が今後益々広がり、持続可能な社会の担い手の育成が加速していくことを期待しております。

名古屋市プロフィール

令和元年7月、内閣府より「SDGs未来都市」に選定。産学官民の協働のプラットフォームである「なごや環境大学」に「SDGs未来創造クラブ」を設置し、市民・事業者のSDGs達成に向けたパートナーシップの取組を創出するまちづくりと次世代を担う子どもたちのSDGsを学ぶ仕組みをつくる人づくりのプロジェクトを推進。

